

1. 島根県の鳥類相

日本鳥類目録改訂第8版には、国内で記録された種として24目83科644種と、国内で繁殖記録のある外来種8目17科46種が報告されている。島根県でこれまでに報告された鳥類は、明治24年に渡邊盈作が動物学雑誌に「島根県下鳥類目録第一回報告」として62種を発表して以来、多くの報告があるが、まとまったものは比較的限られる。和名や分類が現在と異なっているものもあり一概に比較はできないが、1970年の「島根県に分布する鳥類」（島根県発行）では21目48科224種（亜種11種を含む）、1978年の「島根県鳥類目録」（根岸啓二監修、島根県発行）では18目55科286種（亜種を含めば298種）、1983年の「島根県の鳥類」（内田 映著、島根野鳥の会発行）では297種（亜種を含めば305種）、1984年の「しまねの野鳥」（佐藤仁志ほか著、山陰中央新報社発行）では323種・亜種、1994年の「しまねの野鳥(II)」（濱田義治ほか著、山陰中央新報社発行）では338種・亜種、1997年の「しまねの鳥」（日本野鳥の会島根県支部編、島根県発行）では358種が報告されている。なお、現時点で記録されている種は390種余りで、現在日本野鳥の会島根県支部において最新の鳥類目録作成が進められている。このように、本県に生息する鳥類相については、次第にその概要が明らかになってきており、これまでに本県で確認された鳥類は、国内で記録されている鳥類の6割以上に及び、豊富な鳥類相が見られる地域といえよう。

鳥類相の特徴は、地理的条件や自然環境と不可分の関係にある。本県の北西部は日本海に面し、日本海に浮かぶ隠岐諸島もある。また、南部には標高1,000m級の中国山地が連なり、脊梁部を形成している。中国山地は標高がさほど高くなく、古くからたたら製鉄に伴う薪炭生産が盛んに行われてきたため、多くの地域はアカマツやコナラを中心とする二次林が優占し、自然林はごくわずかしか残っていない。また、中海・宍道湖といったわが国で5番目と7番目に大きい湖も抱えている。これらの周辺には、出雲平野や安来平野などの広大な水田地帯も広がっており、一帯は水鳥類の絶好の生息域となっている。さらに、朝鮮半島を含む中国大陸と比較的近い位置にあるなど、自然環境や地理的条件には、他県にみられないようないくつかの特徴があり、それらを反映した鳥類相がみられる。具体的には、マガンやコハクチョウなど冬鳥の日本列島における南限の越冬地となっていることや、大陸系の珍しい鳥類の渡来が多いこと、日本海を直接横断して渡来・渡去する渡り鳥が多いこと、宍道湖・中海が国内最大級の水鳥類の渡来地になっていること、カムリウミスズメなどの希少な鳥類が隠岐諸島などの無人島で繁殖していることなどが上げられる。

2. 掲載種の選定に当たって

このたびの改訂作業に当たっては、改訂しまねレッドデータブック（2014年、島根県）に掲載されている種をベースに、カテゴリー区分のもとに見直しや追加、削除を行った。また、前回の選定と同様に、環境省のレッドデータブック掲載種にはこだわらず、本県における生息状況や絶滅の危険性といった独自の観点から選定作業を行った。特に、留鳥や夏鳥については繁殖状況を重視した。なお、国内に渡来することがまれな種や、迷行的な

種で過去に繁殖した記録のある種などについては、その取り扱いが難しいところがある。そこで、過去の記録が繁殖分布上特異な例と考えられる場合や、繁殖の記録としては不確かな場合などには取り上げないこととした。また、県内への渡来自体がまれな種や、逆に国内で分布が広がった種、県内でよく観察されるようになり増加したと判断される種も除外した。この結果カテゴリーの変更を行った種は19種あり、このうち多くがランクをアップさせた種であった。このほか新たに追加した種があり、絶滅危惧Ⅰ類に1種、Ⅱ類に2種、準絶滅危惧に2種、情報不足に6種を選定した。絶滅した鳥類としては、トキのみを取り上げた。トキのほかにも過去において繁殖していたり、恒常的に渡来していた可能性が高く絶滅種として取り上げてもよいと思われる種もあったが、確かな生息や繁殖の記録がないため取り上げなかった。

分類や学名等については、日本鳥類目録改訂第8版を採用した。亜種の記載があり、国内で1亜種あるいはほぼ一つの亜種が生息または渡来しているとされる場合には亜種として記述したほか、亜種の識別が可能で亜種ごとの評価が異なる場合も亜種として記述した。

（佐藤仁志・森茂晃）

文献一覧

- 渡邊盈作（1891）島根県下鳥類目録第一回報告. 動物学雑誌, 3(32) : 246-250.
- 島根県農林部林政課（1970）島根県に分布する鳥類. 74pp. 島根県農林部林政課, 松江.
- 根岸啓二監修（1978）島根県鳥類目録. 130pp. 島根県, 松江.
- 内田映（1983）島根県の鳥類. 75pp. 島根野鳥の会, 松江.
- 濱田義治・長廻哲雄・森田進・佐藤仁志（1984）しまねの野鳥. 123pp. 山陰中央新報, 松江.
- 濱田義治・長廻哲雄・森田進・石本賢治・安井賢次（1994）しまねの野鳥Ⅱ. 123pp. 山陰中央新報, 松江.
- 日本野鳥の会島根県支部（1997）第51回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌「しまねの鳥」. 198pp. 島根県農林水産部森林整備課, 松江.
- 日本鳥学会鳥類目録編集委員会（2024）日本鳥類目録 改訂第8版. 506pp. 日本鳥学会, 東京.

鳥類掲載種一覧

計82種

絶滅 (EX)

- ・トキ

計1種

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- | | | |
|------------|------------|---------|
| ↑ヨタカ | ・カラスバト | ↑コアジサシ |
| ・カンムリウミスズメ | ・ヒメクロウミツバメ | ◇コウノトリ |
| ↑クロツラヘラサギ | ・ヨシゴイ | ↑ミゾゴイ |
| ・ハチクマ | ・クマタカ | ・オオタカ |
| ・サシバ | ↑コノハズク | ・ブッポウソウ |
| ↑ヤマセミ | ・ハヤブサ | ・ヤイロチョウ |
| ○チゴモズ | ・ウチヤマセンニュー | |

計20種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| ・ヒシクイ | ・カリガネ | ・オオハクチョウ |
| ・アカツクシガモ | ・クイナ | ○バン |
| ・ヒクイナ | ◇マナヅル | ◇ナベヅル |
| ・タマシギ | ◇オオミズナギドリ | ◇ヘラサギ |
| ・ミサゴ | ・チュウヒ | ○ノスリ |
| ・オオコノハズク | ・アカショウビン | |

計17種

準絶滅危惧 (NT)

- | | | |
|----------|----------|-----------|
| ・マガン | ・コハクチョウ | ・ツクシガモ |
| ・オシドリ | ◇セイタカシギ | ・イカルチドリ |
| ・シロチドリ | ・ハマシギ | ◇ズグロカモメ |
| ・サンカノゴイ | ・クロサギ | ・ハイイロチュウヒ |
| ・アオバズク | ・トラフズク | ・コミミズク |
| ・フクロウ | ・チョウゲンボウ | ◇コチョウゲンボウ |
| ◇コシアカツバメ | ○オオヨシキリ | ◇コルリ |
| ・ホオアカ | ○ミヤマホオジロ | ◇クロジ |

計24種

情報不足 (DD)

- | | | |
|---------|-----------|--------|
| ・コクガン | ◆トモエガモ | ○アマツバメ |
| ・ホウロクシギ | ・マダラウミスズメ | ・ウミスズメ |
| ・コウミスズメ | ○ゴイサギ | ・ササゴイ |
| ○アマサギ | ○コサギ | ・イヌワシ |
| ・ツミ | ・ハイタカ | ◆オジロワシ |
| ・アカモズ | ・コヨシキリ | ○オオセッカ |
| ○カラアカハラ | ・コサメビタキ | |

計20種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種 (52種)
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種 (6種)
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ：新規掲載種 (11種)
- ◇：情報不足からの変更種 (11種)
- ◆：情報不足への変更種 (2種)

【掲載順の準拠文献等】

日本鳥類目録改訂第8版

絶滅 (EX)

ペリカン目トキ科

トキ

Nipponia nippon (Temminck, 1835)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



鳥類

選定理由

江戸時代には県内全域にトキが生息していたが、昭和初期に絶滅してしまった。

概要

トキは古くは日本全国に生息していたが、1870年代には乱獲や生息環境の悪化などにより各地で数を減らした。1934年に天然記念物に指定され、1952年に国の特別天然記念物に指定されたが、この時点では能登半島と佐渡島にわずかに生息するのみで、すでに絶滅寸前の状態となっていた。1967年新潟県は佐渡トキ保護センターを建設し、野生のトキへの給餌や飼育個体での人工繁殖を試みた。その後、1976年に環境庁が人工繁殖に取り組むことを決め、1981年には最後に残っていた5羽の野生のトキを捕獲し、人工繁殖を本格的にスタートさせたが成功せず、2003年には日本産最後のトキが死亡した。一方、1998年从中国から2羽が寄贈され、1999年に初めて人工繁殖に成功した。その後、中国産トキによる人工繁殖によりその数を増やし、2008年には佐

渡島で10羽を放鳥した。その後毎年放鳥が続けられ、2024年には佐渡島で野生下の個体が576羽まで増加している。また、2008年に分散飼育実施地として石川県、出雲市、長岡市の3カ所が決まり、出雲市では2011年より分散飼育を開始している。さらに、環境省は2022年に本州における放鳥候補地として石川県能登地域と出雲市を選定し、出雲市は2027年度中の放鳥を目指している。

県内での生息地域・生息環境

昭和の初期から中頃には、隠岐諸島全域に多数生息していたが、狩猟圧などにより急激に減少した。最後の確認は1937年の西ノ島美田地区であるが、1939年の聞き取り調査ではまだ4-6羽が生息していたとの記録が残っており、絶滅は1945年と考えられる。

存続を脅かした原因

人口増加や社会の変化に伴うトキの生息環境(採餌地、営巣地など)の消失、狩猟圧、農業汚染によるエサの減少など。

(執筆者:佐藤 仁志)

参考文献

木村康信(1974) 隠岐の動物。島前の文化財4。隠岐島前教育委員会:18-24。
中川顯允(1973) 石見外記。113pp。石見地方未定資料研究会。大田市。
中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>。304pp。保育社。大阪。
田籠博(2008) 出雲国産物帳 山陰研究シリーズNo.2 島根県古代文化センター蔵。202pp。ワン・ライン。出雲。

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

ヨタカ目ヨタカ科

ヨタカ

Caprimulgus jotaka jotaka Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種(亜種)の県内における生息状況は十分に把握されていないが、生息確認は減少傾向にある。生息地が局所的であるため、環境の変化が起きた場合の影響が大きいと考えられることから絶滅が懸念される。

概要

本種はヨタカ科に属する夜行性の鳥で全長は約29cm。黒褐色や茶褐色、灰色などからなる虫喰い斑状の複雑な模様で、森林の落ち葉や樹皮に紛れることで捕食者から身を守る。昼間、樹上で休息する姿は、木の瘤と見分けがつきにくいほど。夜間、活発に飛び回り、昆虫を捕食する。長い翼でゆっくりと羽ばたき、柔らかく、滑らかに飛翔する。嘴は小さいが根元の方が幅広く、扁平で、口を開けると非常に大きい。食性は、蛾や甲虫類を好み、口を開いて飛翔しながら飛んでいる虫を採食する。繁殖期の夜間には、オスがよく響く声で「キョキョキョキョ…」と連続して長く鳴く。種としては中国から極東アジアに分布し、北方のものは非繁殖期に南へ移動する。国内には、本亜種が夏鳥として九州北部以北の山地に渡来し、おもに森林の林縁部や草地、伐採跡地などで繁殖する。非繁殖期にはインドネシアやフィリピン、インドシナ半島へ渡り越冬する。繁殖期は5-7月頃で、林内の開けたところにある草地や裸地の地上に直

接産卵する。巣材を集めるような巣は作らず、浅くぼみに2個程度の卵を産む。親鳥の複雑な模様が地上に落ちた枯葉のようにも見え、周囲の環境に溶け込むことで天敵から守る。抱卵期間は約19日で、ふ化後の雛も成鳥同様に周囲の地面と見分けがつきにくい幼羽が保護色となっている。全国鳥類繁殖分布調査によると、国内における確認地点は1970年代から1990年代にかけては減少したものの、2010年代にかけては確認地点が大きく増加している。

県内での生息地域・生息環境

県内では、中国山地のほか、本種の好む環境があるところでは、海岸に近い山でも鳴き声を確認することがあるが、繁殖は一部の限られた地域で確認されているのみで記録は多くない。ただし、夜行性で観察されにくいこともあり、県内の生息状況や分布については不明な点が多い。県西部では、山林の伐採地で繁殖が確認されたことがある。

存続を脅かす原因

森林の開発や林相の変化などによる生息環境の減少、中継渡来地や越冬地における環境の悪化など。餌資源となる甲虫などの昆虫類の減少。シカの増加などによる山地の下層植生の急激な変化や営巣適地の減少。

(執筆者:星野 由美子・森 茂晃)

参考文献

叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥。719pp。山と溪谷社。東京。
中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp。保育社。大阪。
多田英行(2022) 岡山県中部におけるヨタカの営巣環境の特徴。日本鳥学会誌。71(2):137-144。
内田博(2011) ヨタカの抱卵行動。日本鳥学会誌。60(2):238-240。
植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を撮ろう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会。東京。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ハト目ハト科

カラスバト

Columba janthina janthina Temminck, 1830

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧



選定理由

本種(亜種)は、おもに島嶼部で人の出入りが少ないタブノキなどの常緑樹林を好んで生息する。県内では隠岐諸島や高島などの限られた地域で生息しており、その数は多くない。生息地は限られており、森林の伐採や人の立ち入りなどによる生息環境の悪化が危惧される。

概要

本種は、ハト科カワラバト属で全長は約40cm。ハトの仲間では最大級の大きさ。国内には3亜種が生息する。小笠原諸島に亜種アカガシラカラスバト、先島諸島に亜種ヨナグニカラスバトが生息し、本亜種は基亜種として県内を含め、伊豆諸島や本州西南部沿岸、四国、九州、南西諸島などに分布する。本亜種は、全身が黒く、頭部や頸、背や腰などに緑や紫色の金属光沢がある。よく茂った常緑樹林やスギ林を好み、おもに樹上でスダジイやタブノキ、アブラギリなどの木の実を好んで食べるが、地上で堅果などを採食することもある。「ウウー ウウー」あるいは「グルグルウー グルグルウー」などと聞こえる太く低い独特の声を、牛を連想させるためウシバトと呼ばれることもある。ディスプレイフライトをしながら鳴くこともある。本亜種は、伊豆諸島の島間を移動していることが知られているほか、近年ではGPSを用いた追跡などにより、

参考文献

安藤温子・森由香・佐藤望(2017)伊豆諸島八丈島と八丈小島におけるカラスバトの島間移動行動。Bird Research, 13: 35-40.
深谷治(2005)隠岐の鳥カラスバト-島前中ノ島における生息状況-。隠岐の文化財, 22: 23-29.
深谷治(2023)隠岐諸島の無人島における鳥類。隠岐の文化財, 40: 31-38.
中内拓也(2024)山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京。
Soon Kyoo Choi, Yung Chul Park, Jong Chul Park, Gi Chang Bing, Woo Yuel Kim (2019) Migration by the Japanese Wood Pigeon (*Columba janthina*) Across the Islands of East Asia: Direct Tracking by Satellite Telemetry. Pacific Science, 73(2): 225-230.

(執筆者: 星野 由美子)

韓国、鬱陵島と隠岐の間でも移動が確認されており、1つの島に留まらず長距離移動を行っている可能性が高い。繁殖期は2-9月で、1巣に1つの卵を産むとされ、おもに樹上に木の枝などを用いて粗く編んだ皿形の巣を作る。国の天然記念物に指定されている。

県内での生息地域・生息環境

県内では、常緑樹林が発達した高島や隠岐諸島といった離島で生息が確認されるほか、おもに春に島根半島などでも観察されることがある。よく茂ったタブノキなどの常緑樹林やスギの混交林などで営巣する。確実に繁殖が確認されているのは隠岐のみで、島後や西ノ島、中ノ島などの大きな島のほか、大波加島や大森島などの無人島でも繁殖する。冬季にはシイ類の樹林などで地上採食する群れが観察されることがある。隠岐諸島全域が本亜種の繁殖地としてNGOバードライフ・インターナショナルの「鳥を指標に生物多様性の高い場所(IBA)」に選定されている。

存続を脅かす原因

よく茂った常緑樹林を好んで生息するため、改変面積が狭くても森林が分断されたり、部分的な伐採で林相が変化するだけでも影響する懸念がある。営巣地への人の立ち入りなど。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チドリ目カモメ科

コアシサシ

Sterna albifrons sinensis (Gmelin, 1789)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

県内では過去の記録のほとんどが渡りの時期であり、以前は旅鳥とされていたが、2014年以降は繁殖が確認されている。しかし、確認されている繁殖地は河口部の中州1カ所であり、その存続基盤はきわめて脆弱である。

概要

全長約24cm。全体的に白っぽい小型のアジサシ類。体と翼の上面は淡灰色で、頭部は黒く額が白い。嘴は黄色で先端に小さな黒色部がある。脚は橙黄色。種としてはユーラシア大陸からオセアニアにかけて世界中に広く分布し、本亜種は東南アジア、韓国、日本などで繁殖し、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬するとされている。国内には夏鳥として本州以南に渡来する。4月頃に渡来し、9月頃まで見られ、海岸、河川、湖沼などの水辺に生息し、水面上を飛んで、時には停空飛翔をしながら、ダイビングして小魚を捕食する。繁殖期は5-8月。繁殖適地は小石混じりの乾燥した裸地であり、砂浜海岸や、河川の川原や中州、埋め立て地などの砂礫地を利用して集団で繁殖する。地面を浅く掘った

参考文献

環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京。
松岡好美(2006)コアシサシ。Bird Research News, 5(5): 4-5。
本吉洋子(1996)飯梨通信(4月-5月)。スペキュラム, 52: 3。
日本野鳥の会島根県支部(1997)第51回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌「しまねの鳥」, 198pp. 島根県農林水産部森林整備課, 松江。

(執筆者: 森 茂晃)

巣をつくり、1-3卵を産む。抱卵日数は約20日。

県内での生息地域・生息環境

1990年代に飯梨川で繁殖を示唆する情報があったが、その後は確認されず、県内では旅鳥とされていた。2014年に県西部で繁殖が確認され、2025年時点でも継続しているが、営巣地は1カ所であり小規模である。渡りの時期には、宍道湖・中海や河川の河口部などで観察されることがあるが、近年は繁殖が確認されている周辺以外の情報は少ない。

存続を脅かす原因

国内の繁殖地では草地化による裸地の消失や、造成地だった場合には工事の進行で失われるなど繁殖適地が安定的ではない。また、カラス類やノネコなどによる卵や雛の捕食、工事やレジャー等による人為的攪乱を受けることも多いとされる。県内で確認されている繁殖地は1カ所のみである上に、こうした懸念は十分に考えられる。また、営巣地が河口部の中州であるため、繁殖期に増水して営巣地が流されてしまう危険性がある一方、中州が岸と地続きになると地上性の捕食者の侵入が容易になるほか、人の立ち入りによる攪乱も懸念される。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チドリ目ウミスズメ科

カムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume (Temminck, 1836)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



選定理由

確実な繁殖地は隠岐諸島の小さな島嶼1カ所、存続基盤はきわめて脆弱。また、繁殖期間以外にも県下の日本海域で観察されることがあるが、滞在期間や分布、生息数などの実態は不明であり、情報を収集しておく必要がある。

概要

全長約24cm。夏羽は頭頂に黒く細長い冠羽がある。冬羽はウミスズメに似るが、本種は眼の前後に白色部がある。おもに日本近海の島嶼で繁殖し、国外では韓国でも繁殖が報告されている。繁殖以外は海上で生活し、潜水して魚類や甲殻類などを捕食する。種全体で5,000—10,000羽程度と見られ、現状維持か減少傾向とされる。繁殖地ではネズミ類やカラス類の捕食による影響が大きく、例えば福岡県小屋島ではドブネズミの侵入によるものと考えられる死体大量に発見され、殺鼠剤の駆除は容易には進まなかったとされる。国の天然記念物。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では1969年に採集された卵標本をはじめ、以前から繁殖の可能性が示唆されていたが、2010年のモニタリングサイト1000海鳥調査において

参考文献

環境省中国四国地方環境事務所・特定非営利活動法人隠岐しぜんむら(2024) 令和5年度マリンワーカー事業 大山隠岐国立公園隠岐地域星神島ドブネズミ駆除業務報告書, 54pp. 環境省中国四国地方環境事務所, 岡山.
環境省自然環境局生物多様性センター(2023) 2022年度モニタリングサイト1000小島嶼(海鳥)調査報告書, 162pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
佐藤仁志・森茂晃・八幡浩二(2012) 隠岐諸島におけるカムリウミスズメ*Synthliboramphus wumizusume*の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 15: 299-306.
山本裕(2010) カムリウミスズメ. Bird Research News, 7(9): 4-5.

無人島の一つで繁殖が確認され、島根県の調査などでも確認されてきた。しかし、同地では長くネズミ類の生息が確認されていなかったものの、2021年度に環境省により実施された調査でドブネズミの侵入が確認された。同省は2022年度から殺鼠剤散布による駆除を試みているが、油断できない状況としている。2022年度のモニタリングサイト1000海鳥調査では、確認された6巣のうち抱卵中は1巣で、ほかの巣の卵は冷たくなっていたことから放棄卵と考えられるとし、過去に巣があった場所で見つからなかったこともあったとしている。隠岐諸島では、島根県の調査で繁殖地以外の島の周辺海上にも夜間集まっている様子が観察されているが、繁殖は確認されていない。また、それらの島はネズミ類の生息情報があるため、仮に繁殖していたとしてもその数は少ない可能性が高い。海上では、繁殖期には県西部の沖合でも観察されているほか、隠岐航路では繁殖期の前後などにもまれに確認されることがある。

存続を脅かす原因

繁殖地へのネズミ類の侵入は小型海鳥類に対しては深刻な問題である。また、カラス類による捕食も考えられ、磯釣りなどで訪れた人のゴミの残置がこれらの定着を助長する可能性も懸念される。海上では油汚染により一気に危機的な状況が増大する可能性があり、魚網への絡まりなども起きている可能性も考えられる。(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ミズナギドリ目ウミツバメ科

ヒメクロウミツバメ

Hydrobates monorhis (Swinhoe, 1867)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 深谷治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



選定理由

国内では5,000つがい以下との推定もあり、県内の確実な繁殖地は隠岐諸島の無人島1カ所のみで、その存続基盤はきわめて脆弱である。

概要

全長約20cmの小型の海鳥。全体に黒褐色で、腰に白色部はない。翼はウミツバメ類としては短めで、上面は大雨覆が淡色のため、その部分が淡い帯状に見える。初列風切基部の羽軸は白いが、野外での確認は難しい。日本のほかロシア極東部、韓国、中国沿岸の離島で繁殖している。国内には夏鳥として渡来し、青森県、岩手県、石川県、京都府、福岡県などの島嶼で繁殖している。繁殖地では、夜間に飛来し、夜明け前に飛び立つ。岩の隙間や土中に穴を掘って営巣するほか、オオミズナギドリの古巣などを利用して繁殖する。繁殖期以外には外洋に生息し、生活史や食性についてはほとんど知られていないとされる。

県内での生息地域・生息環境

本土側では松江市で保護個体の記録が2例あるほか、海上は生息域として考えられるものの、確実に生息地として判明しているのは隠岐諸島の繁殖地の

参考文献

環境省中国四国地方環境事務所・特定非営利活動法人隠岐しぜんむら(2022) 令和3年度マリンワーカー事業 大山隠岐国立公園隠岐地域星神島鳥類生息環境調査等業務報告書, 45pp. 環境省中国四国地方環境事務所, 岡山.
環境省中国四国地方環境事務所・特定非営利活動法人隠岐しぜんむら(2024) 令和5年度マリンワーカー事業 大山隠岐国立公園隠岐地域星神島ドブネズミ駆除業務報告書, 54pp. 環境省中国四国地方環境事務所, 岡山.
環境省自然環境局生物多様性センター(2023) 2022年度モニタリングサイト1000小島嶼(海鳥)調査報告書, 162pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪.

みである。隠岐諸島では、1953年および翌年に成鳥と雛が採集され、本種の繁殖が明らかになったが、その後はわずかな目撃情報のみであった。2005年にモニタリングサイト1000海鳥調査で、無人島の一つで繁殖していることが改めて確認された。その後も2010年度以降3年毎に行われている同調査で継続して巣が確認されている。ただし、これまでは本種のような小型海鳥類の繁殖地の脅威になると考えられるネズミ類の生息が確認されていなかったところへ、2021年度に環境省により実施された調査でドブネズミの侵入が確認された。モニタリングサイト1000海鳥調査では、2010年度以降、固定調査区が設定されているが、2022年度は7巣のみで、それまでの13—37巣に比べて大幅に減少している。同省は2022年度から殺鼠剤散布による駆除を試みているが油断できない状況と考えられる。

存続を脅かす原因

繁殖地へのネズミ類の侵入は小型海鳥類に対しては深刻な問題である。また、カラス類などによる捕食も考えられ、磯釣りなどで訪れた人のゴミの残置がこれらの定着を助長する可能性も懸念される。また、繁殖が確認されている島は小さく、オオミズナギドリも繁殖しているため、営巣場所をめぐる競争も考えられる。(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウノトリ目コウノトリ科

コウノトリ

Ciconia boyciana Swinhoe, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



鳥類

選定理由

1971年に国内における野生個体は絶滅したが、野生復帰の取り組みが進み、現在では再導入された個体が全国各地で繁殖している。県内では、この放鳥由来の個体が繁殖しているほか、冬期には大陸産の野生個体がまれに渡来する。繁殖地が限られた地域に限定されていること、種の存続には十分ではない生息数であることから絶滅のおそれがある。種の保存法に基づく国内希少野生動物種に指定されている。

概要

本種は全長が約110cm、翼を広げると2m以上にもなる大型の鳥。体と尾羽は白く、翼の風切羽が黒い。嘴は太くて長く、成鳥は黒い、脚は赤い。野生個体の繁殖地は、シベリア南東部から中国東北部で、冬季は中国東南部へ渡る。かつては国内に広く分布していたが、狩猟圧、営巣木の消失、餌資源の減少と水銀中毒、個体数減少による遺伝的多様性の低下など多くの要因により野生絶滅となった。その後、人工繁殖の成功によって飼育個体が増え、2005年から野生復帰に向けた放鳥が開始された。現在は国内に500羽以上の再導入由来の個体が生息している。湿地や河川、浅い湖沼や里地の水田などで採食し、浅い水辺をゆっくりと歩きながら獲物を探し、長い嘴で捕らえる。食性は動物食で、おもに魚類のほか、両生・は虫類、昆虫類や甲殻類など多種多様なものを食べる。繁殖期は3—7月で、人工構造

参考文献

星野由美子(2018) 島根県雲南市におけるコウノトリの *Ciconia boyciana* の繁殖に関する観察記録。島根県立三瓶自然館研究報告, 16: 69-73.

星野由美子・森脇昭子・高橋誠(2023) 島根県雲南市大東町におけるコウノトリ繁殖行動のビデオ録画による観察結果。野生復帰, 11: 15-19.

兵庫県教育委員会・兵庫県立コウノトリの郷公園(2011) コウノトリ野生復帰ブランドデザイン。36pp. 兵庫.

叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥。719pp. 山と溪谷社, 東京.

内藤和明・星野由美子・高橋誠二(2020) 野外でのビデオ録画によるコウノトリの繁殖の行動解析。野生復帰, 8: 1-9.

物の上に直径2m近い大きな巣を作る。卵は2—5個産卵し、31—35日でふ化する。雛は約2カ月で巣立つ。親鳥は雌雄交代で抱卵と育雛を行う。国の特別天然記念物。

県内での生息地域・生息環境

大陸産のものと思われる野生個体は、斐伊川や飯梨川河口周辺などで記録があるほか、隠岐(島後)では複数回越冬したことがある。野生復帰による放鳥個体は、2005年以降、県内各地に飛来していたが、2017年から雲南市で繁殖が始まった。2022年頃からは県内各地で複数のつがいによる造巣行動が確認されるようになり、2025年には県内で4つがいが繁殖した。

存続を脅かす原因

開発や耕作放棄地の増加などによる生息適地の減少や農業の使用による採食条件の悪化など。営巣適地の不足や再導入個体の遺伝的多様性の低さ。

特記事項

再導入個体の考え方については、2019年の環境省レッドリストの見直しで、野生絶滅(EW)の基準を満たさない状況を5年以上にわたって維持していることを踏まえて絶滅危惧ⅠA類(CR)に変更したことを参考とした。なお、2026年3月の見直しでは、絶滅危惧ⅠB類(EN)に変更されている。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ペリカン目トキ科

クロツラヘラサギ

Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

世界的に局地的な分布で、生息環境の減少が深刻とされる。県内の渡来数は1~数羽程度であり、毎年のように越冬あるいは越冬する個体が観察されるが、もともと生息に適した環境は少ないため、存続基盤は脆弱と考えられる。絶滅のおそれのある野生動物種の保存に関する法律で国内希少野生動物種に指定されている。

概要

全長約70—80cm。しゃもじ形の長い嘴は、成鳥は全体に黒く皺があるが、若鳥は皺がなく肉色を帯びている。体は全体に白いが、成鳥の夏羽は冠羽と胸に黄色味があるほか、幼鳥や若鳥は翼の先端が黒く、飛行時に目立つ。ヘラサギに似ているが、眼先は黒い皮膚が露出している。干潟、水田、河川、湖沼などの湿地に生息し、嘴を半開きにして水の中に入れ、横に振りながら、魚類や甲殻類などを捕食する。朝鮮半島北西部と中国東北部などで繁殖し、台湾、香港、中国、ベトナム、日本などで越冬する。かつては九州の干潟に局所的に越冬する鳥で、世界的にも香港や台南に大きな越冬地がある程度だったが、その生息数は急激に増加しているとされる。しかし、この増加のすべてが個体数の増加ではなく、見つかっていない越冬地が開発などで消失し、既知の越冬地に移動

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp. ぎょうせい, 東京.

日本クロツラヘラサギネットワーク・日本野鳥の会(2024) クロツラヘラサギ世界一斉センサス集計結果。https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/bfs-pj/bfs-census2024/. (2025年4月26日閲覧)

植田睦之(2005) クロツラヘラサギ。Bird Research News, 2(7): 4-5.

植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を撮ろう 2016-2021年。175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

してきた可能性もあると考えられている。国内の記録数も1990年から2024年にかけて増加傾向にあるが、生息環境は狭まりつつあるとされる。

県内での生息地域・生息環境

おもに旅鳥または冬鳥として1羽あるいは数羽程度が観察される。県内には干潟のような広い湿地環境がほとんどないが、水深が浅い砂泥地がある河口部や湖岸、水田などで採食する姿が見られる。県東部には、流入河川の広い河口部と周辺に水田地帯などがある宍道湖や中海があり、県中部や西部に比べると記録が多い。越冬することもあり、その場合は若齢個体であることが多いと考えられる。隠岐諸島でも確認されているが、一時的な渡来と考えられる。

存続を脅かす原因

国内では生息環境が開発や整備などで狭まって来つつあるとされる。また、餌生物からの有害物質の摂取の懸念のほか、釣り糸の絡まりなどの事故も多くなっているとされる。県内では、もともと生息に適したが環境が少ないため、人為的な改変や植生遷移などで狭まった場合には影響が大きいと考えられる。また、一時的でも極端な増水あるいは濁水などで生息環境が縮小したり、写真撮影などで過度な接近が繰り返されたりすることによる影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ペリカン目サギ科

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis sinensis (Gmelin, 1789)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



選定理由

県内で繁殖期に確認される個体数が減っていると考えられる。本種(亜種)の生息に適した抽水植物の群落が広がる湿地が県内には少なく、こうした環境は人為的な改変も受けやすい。

概要

小型のサギ類で全長約37cm。全体に茶褐色から淡黄色の羽色で、成鳥と幼鳥あるいはオスとメスで模様には違いがある。近縁のオオヨシゴイやリュウキュウヨシゴイとは、羽色のほか、本種(亜種)の虹彩は円く後方で途切れないことで見分けられる。夏鳥として5-6月頃に渡来し、ヨシやガマ、マコモなどの抽水植物が繁茂する湖沼や河川の岸辺などに生息する。ヨシ原や水面の上を低く飛ぶことはあるが、ほとんど草むらの中に潜んでいて姿を見る機会は少ない。渡来初期に、なわばりを示すような追尾行動が見られる。夕方や早朝などに「ウー ウー」とうめくような声で鳴くことがあり、存在に気づく場合もある。繁殖はヨシやガマなどの茎や葉を支えに営巣し、4-8個の卵を産む。単独で営巣するが、良好な生息地では数個から十数個の巣が集中することがある。多くの場合、待ち伏せして魚類やカエルなどを捕食する。警戒すると嘴を上に向けて頭を伸ばして静止し、周囲の環境に擬態することでよく知られている。全

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい。東京。
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>。304pp。保育社。大阪。
上田恵介(1996)ヨシゴイはなぜ集団で繁殖するのか:巣場所選びと繁殖成功。Strix。14: 55-63。
植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会。東京。
内田博・松田喬(1990)ヨシゴイ*Ixobrychus sinensis*の集団繁殖。日本鳥学会誌。39: 53-61。

国繁殖分布調査では2010年代にかけて西日本の記録が減少したとされる。繁殖環境の保全が重要であるほか、越冬地での狩猟圧の影響も懸念されている。

県内での生息地域・生息環境

過去には宍道湖西岸域などで繁殖が確認されており、現在も繁殖期に観察されることから夏鳥として渡来していると考えられる。ただし、1990年代もしくは2000年代の初め頃までは繁殖期の観察情報が比較的多い。近年は少ない。また、秋の渡りの時期あるいは繁殖期でも渡来初期に観察されるヨシ原はいくつかあるが、実際に繁殖している可能性がある場所はわずかと考えられる。2024年に県東部で生息に適していると思われる場所から任意に5カ所を選択して行った調査では、繁殖は未確認だが1カ所だけ6-7月に2羽以上の生息が確認された。県東部では冬季(12・1月)の記録や3月の観察例もある。隠岐諸島は古い文献に繁殖を示唆する記載があるものの、近年は一過性の渡来の可能性がある程度と考えられる。

存続を脅かす原因

ヨシ原などの生息適地の減少や湿地の改変。繁殖期に河川や湖沼で極端な増水が起きた時の影響も懸念される。ほかに東南アジアなどの越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ペリカン目サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck, 1836)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)



選定理由

おもに夜行性で森林に生息するため県内の生息状況は十分に把握されていない。繁殖状況など不明な点が多いが、生息環境の減少とともに生息数も減少傾向にあると考えられる。今後も情報の集積や調査が望まれる。

概要

本種はペリカン目サギ科に属する中型のサギで、全長約49cm。頭頂が茶褐色で部分的に暗青色が入る。後頭の羽毛が短い冠羽状。喉から体下面は淡褐色で前頸から胸には数本の黒褐色の縦斑がある。脇腹と下腹部には褐色斑が不規則にある。雌雄同色。本種は、おもに夏鳥として本州の新潟県以南、四国、九州、伊豆諸島などに渡来し、低山や丘陵地のスギ、ヒノキなどの針葉樹やクリ、ナラ類などの落葉広葉樹、あるいは針広混交林のよく繁った樹林に生息する。丘陵地の谷戸田のような里山の環境が生息に適していると考えられる。おもに夕方から夜間にかけて、あるいは雨や曇りの日暮れから数時間と夜明け前の数時間、ゆっくりとしたテンポで「ポー ポー」という低い声で繰り返し鳴く。夜行性のため日中は林内で休息しているものが多いが、茂みの中や木陰などの暗い場所では活動していることがある。冬季は、フィリピンおよび台湾を含む中国南部などで越冬するほか、一部は南西諸島や種子島などで越冬する。食性

参考文献

浜口寛・石川正道・小西恭子・永井敏和・大鹿裕幸・川上和人(2014)愛知県西三河地域におけるミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の生息環境モデル。日本鳥学会誌。63(1): 33-41。
叶内祐也(2024)山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥。719pp。山と溪谷社。東京。
植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会。東京。

は動物食で、沢筋や谷間の漂流などでサワガニやミズズ、魚類などを捕食する。繁殖期は5-7月で、樹上に皿形の巣をつくるがコロニー性はなく、つがいごと分散して繁殖する。特に沢沿いの湿潤な環境を好み、樹冠が閉じた薄暗い谷地形に営巣することが多い。1回の繁殖で3-5個の卵を産み、親鳥は交代で抱卵する。約25日で雛がふ化し、約1カ月で巣立つ。開けた場所にはほとんど出ず、単独行動するために観察される機会は少ないと考えられる。全国的には、2000年代までは減少傾向にあると言われていたが、2010年代は観察地点が増加した。これは環境省レッドリストに選定され注目されたことと、調査方法が確立したことに起因している可能性がある。

県内での生息地域・生息環境

夏鳥として4月上旬から中旬に渡来する。県内では隠岐を含む各地の山地から丘陵地で鳴き声の確認などの情報があるが、繁殖の確認はきわめて少なく、その数や分布などの状況はほとんどわかっていない。

存続を脅かす原因

森林の開発や伐採、林相の変化などによる生息適地の減少など。越冬地や中継地である東南アジアの森林減少も影響を与えていると考えられる。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タカ目タカ科

ハチクマ

Pernis ptilorhynchus orientalis Taczanowski, 1891

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):北脇努

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



鳥類

■ 選定理由

本種(亜種)は食物連鎖の頂点に立つ猛禽類であり、里山の丘陵帯から山地において餌となる生物が十分に生息できる環境が保たれていることを象徴する。県内の生息状況について十分に把握されているわけではないが、個体数は多くないと考えられる上に、営巣に適した生息適地は減少している。

■ 概要

種としては、アジアおよびヨーロッパに分布する。国内には本亜種が夏鳥として丘陵地から山地の林に渡来し、5月から10月頃まで見られる。全長はオス約57cm、メス約61cmで、トビ(全長約60cm)と同じくらい少し小さい程度の猛禽類で、姿はクマタカに似ているが、本種の方が飛行時の翼の幅が狭く見える。また、飛行中、ほかのタカ類に比べると頸が細長く見える。全体に褐色を主体にした色彩であるが、中間型(茶色形)や淡色形(白色形)、暗色形(黒色形)などにグループ分けされるほど個体による変化が大きい。タカの仲間でありながら蜂の幼虫を好んで食べるといった特異な習性を持っている。地中や樹上に作られたスズメバチ類の巣を攻撃して捕食し、雛にも給餌する。ほかにカエルやトカゲなども捕らえる。アカマツ、カラマツ、スギ、モミなどの針葉樹や、コナラ、クリ、カシ類などの広葉樹に巣をつくる。産卵は5月下旬か

● 参考文献

濱田義治・長畑哲雄・森田進・石本賢治・安井賢次(1994)しまねの野鳥Ⅱ。123pp。山陰中央新報。松江。
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい。東京。
久野公啓(2015)ハチクマ。Bird Research News, 12(9): 1-2。
森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男(1995)図鑑日本のワシタカ類。631pp。文一総合出版。東京。
植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会。東京。

ら6月下旬で抱卵期間は30—35日。行動圏は広く、育雛中、巣から10km以上離れた場所まで蜂の巣をとりに出かけるのは、ごく日常的なことであるとされる。また、ディスプレイフライトは繁殖期を通して見られるが、巣の近くのみでなく、10km以上離れた場所でも観察されるという。2016—2021年の全国繁殖分布調査では、記録メッシュ数は増加しているが現地調査の確認地点数は減少しており、個体数の増減は明らかでないとする。

■ 県内での生息地域・生息環境

夏鳥として渡来し、丘陵地から山地にかけて見られる。行動圏の広さもあり県内の生息状況は十分に把握できていないが、観察などの情報数から考えると個体数は多くないと推測される。1990年に浜田市で雛のいる巣に蜂の巣を運び込む様子が観察されるなど繁殖が確認されている。隠岐諸島では、夏季にも観察されていることから繁殖している可能性があると考えられるが、確実な記録は見当たらない。

■ 存続を脅かす原因

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少や餌動物の減少などが考えられる。

(執筆者: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タカ目タカ科

クマタカ

Nisaetus nipalensis orientalis (Temminck & Schlegel, 1844)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):北脇努

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

■ 選定理由

森林性の大型のタカで、生態系の頂点に立つ種である。生息数が多い上に、山林の伐採や風力発電施設の新設などの開発行為に伴う影響が懸念される。また、近年繁殖率の低下も指摘されている。

■ 概要

種としては、スリランカ・インド南西部から中国南部・日本にかけて分布する。国内に生息する亜種クマタカは、韓国で観察された情報もあるが、日本が主要な生息地であり、ほぼ日本特産の亜種といえる。国内では、北海道から九州にかけて留鳥として分布し、1年中、同一地域で暮らす。国内の生息数については、最低でも約900ペア(1,800羽)が確認されたという報告がある。生息域の地形的要素としては大きな谷が重要で、行動圏は4—25km²といわれている。餌はノウサギ、テンなどの哺乳類や、アオダイショウ、シマヘビなどの爬虫類、ヤマドリ、キジなど中型以上の鳥類が多い。1—2月頃、求愛行動や巣材運びを行い、

● 参考文献

飯田智彦・飯田繁・毛利孝之・井上晋(2007)クマタカの繁殖成功率の低下と行動圏内の森林構造の変化との関係。日本鳥学会誌。56(2): 141-156。
環境庁自然保護局野生生物課編(1996)猛禽類保護の進め方(特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて)。105pp。財団法人日本鳥類保護連盟。東京。
環境省自然環境局野生生物課編(2002)改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2 鳥類。278pp。財団法人自然環境研究センター。東京。
田村和巳・鈴木由季子・白井明夫・山岸哲(2015)クマタカの繁殖成功率とそれに係わる環境要因。日本鳥学会誌。64(2): 195-206。

3月下旬から4月に産卵する。繁殖は古い巣を直しながら毎年使用することが多く、行動圏内に予備の巣を持つことが知られている。営巣に使用する木は、アカマツなどの針葉樹の大木が多く、幹上部の大枝の分かれ部などに、直径1m以上、厚さ70cm以上の大きな巣を作る。

■ 県内での生息地域・生息環境

ある程度急峻な斜面を持つ谷のある森林地帯が主たる生息域で、平野部と里山低地部を除くほぼ全域に生息している。営巣は、山地の中腹より下部の針葉樹林の大木で行うことが多く、高樹齡の林内や伐採跡などを餌場とする。

■ 存続を脅かす原因

ダムや道路建設などの林地開発、松くい虫被害等による繁殖していたアカマツの消失、森林伐採や、有害化学物質の蓄積による繁殖力の低下など。

(執筆者: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タカ目タカ科

オオタカ

Accipiter gentilis fujiyamae (Swann & Hartert, 1923)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):野津登美子

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧



選定理由

本種(亜種)は里山部における食物連鎖の頂点に立つ大型の猛禽類で、その生息基盤が脆弱である。関東などでは近年生息数が増加し、レッドデータブックのランクが下げられたりしているが、本県においてはそのような状況はみられない。県内で繁殖が確認されている地域は、里山の比較的生活圏に近い場所、開発行為が行われやすいことや、松くい虫被害に伴い営巣に適したアカマツの枯死などにより生息環境が悪化してきている。

概要

種としてのオオタカは、ユーラシア大陸および北アメリカ大陸の北部を中心に北半球に広く分布しており、本亜種は国内では留鳥として南西諸島、南方諸島を除く九州以北に分布する。オスの全長約50cm、メス約56cmのクラス大の猛禽類で、森林内や森林に接した草地や農地に生息する。おもにハト類などの鳥類を餌としており、まれにノウサギなどの哺乳類も

参考文献

堀江玲子・遠藤孝一・野中純・船津丸弘樹・小金澤正明(2006) 栃木県那須野ヶ原におけるオオタカの営巣環境選択。日本鳥学会誌, 55(2): 41-47。
環境庁自然保護局野生生物課編(1996) 猛禽類保護の進め方(特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて)。105pp. 財団法人日本鳥類保護連盟, 東京。
内田博・高柳茂・鈴木伸・渡辺孝雄・石松康幸・田中功・青山信・中村博文・納見正明・中嶋英明・桜井正純(2007) 埼玉県中央部の丘陵地帯でのオオタカ *Accipiter gentilis* の生息状況と営巣特性。日本鳥学会誌, 56(2): 131-140。
植田睦之・百瀬浩・中村浩志・松江正彦(2006) 栃木県と長野県の低山帯におけるオオタカ・サンバ・ハチクマ・ノスリの営巣環境の比較。日本鳥学会誌, 55(2): 48-55。

捕食する。アカマツなど針葉樹の太枝の付け根などに、小枝を組み合わせた直径60—70cm、厚さ55cmほどの巣をかける。5月頃3—4個の淡青灰色の卵を産み、抱卵日数は35—38日で、おもにメスが抱卵する。

県内での生息地域・生息環境

県内では、里山を中心に広く生息しているが、繁殖個体は限られておりサンバの繁殖個体数に比べるとかなり少ない。冬に漂行した個体が農耕地や川原などで比較的良好に見られる。以前は、夏季にも個体が確認されることなどから、繁殖が現実視されていたが、営巣確認には至っていなかった。近年(2000年頃から)になって、数は多くはないが繁殖が確認されるようになった。繁殖は低山部の森林で行い、営巣木はアカマツが多い。

存続を脅かす原因

林道整備などの開発行為による生息環境の悪化、近年の松くい虫被害に伴う営巣木として利用するアカマツの枯損など。

(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タカ目タカ科

サンバ

Buteo indicus (Gmelin, 1788)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

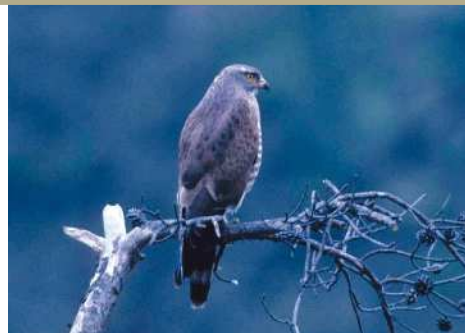
撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



選定理由

かつては、県内の里山で普通に見られたが、近年渡来数が激減した。里山に近い環境に営巣するため、人為的な改変により影響を受けやすく、タカ類の中ではもっとも減少率が高い種と考えられ、絶滅が危惧される。

概要

日本、朝鮮半島、中国東部で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する。夏鳥として渡来する中型のタカで、全長約50cm、翼開長110cm。頭部の白色の眉斑が特徴で、本州から九州の低山や丘陵などで繁殖する。アカマツ林に営巣することが多く、巣はアカマツなどの10—20mの枝上に作り、生息環境がよければ毎年同じ巣を補修して連続して使用することが多い。しかし、近年では松くい虫被害に伴うアカマツの枯損などにより、スギなどマツ類以外の樹木に営巣することが多くなっている。餌場は、水田や畑、伐採地などの開けた土地で、谷に水田が入り込んだ地域を特に好む。一方、水田などがほとんどない里山にも生息することが知られており、山サンバまたは山のサンバと呼ばれている。近年の調査により、里サンバは急激に減少したが、山サン

バはほとんど変わっていないことが分かってきた。里サンバは、電柱や木の枝などにとまって地上にいるヘビやカエル、トカゲ、大型昆虫などを捕食する。「ピックイー」とか「キンミー」と聞こえる独特の鳴き声の特徴。春に南方から渡来し、4月末から5月初めにかけて2—4個の卵を産む。1カ月ほど雛がかえり、40—45日で巣立つ。10月初旬頃、大群で渡りをする事が知られているが、日本海側では太平洋側のように大きな群れを見ることがないことから、山陰地方で繁殖した個体は、瀬戸内海に抜けて九州に入り、島ついに東南アジア方面へ渡っていくのではないかと考えられる。

県内での生息地域・生息環境

県内全域の里山に生息し、特に谷あいの入り組んだ水田地域を好む。中には、里山の森林地帯を中心に生息する個体もみられ、近年では森林地帯の個体が多くなっている。

存続を脅かす原因

里山における森林の開発、松くい虫による営巣木の減少、谷奥部の水田や畑地の放棄、東南アジアなど越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

(執筆: 佐藤 仁志)

参考文献

東淳樹(2004) サンバとその生息地の保全に関する地域生態学的研究。我孫子市鳥の博物館調査研究報告, 12: 1-119。
東淳樹・時田賢一・武内和彦・恒川篤史(1999) 千葉県手賀沼流域におけるサンバの生息地の土地環境条件。農村計画学会誌, 18(18-suppl): 253-258。
樋口広芳編(2013) 日本のタカ学, 364pp. 東京大学出版会, 東京。
環境省自然環境局野生生物課(2013) サンバの保護の進め方。https://www.env.go.jp/press/files/jp/23706.pdf。(2025年9月1日閲覧)
植田睦之・百瀬浩・中村浩志・松江正彦(2006) 栃木県と長野県の低山帯におけるオオタカ・サンバ・ハチクマ・ノスリの営巣環境の比較。日本鳥学会誌, 55(2): 48-55。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

フクロウ目フクロウ科

コノハズク

Otus sunia japonicus Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

本種（亜種）は夜行性ということもあり、県内の生息状況は十分に把握されていないが、近年、これまで生息していたとされる地点で観察されなくなるなど、個体数が減少してきたと思われる。もともと生息数が多くないうえに、生息地は限られており、森林環境の変化や越冬地の環境変化による絶滅が懸念される。

概要

本種（亜種）はフクロウ科コノハズク属で、フクロウの仲間では国内最小の全長約20cm。体色は、淡灰褐色の体に黒色、褐色、淡い橙色、白色などが複雑に入り交じり、樹木の幹や枝と見分けにくい。また、全体に赤褐色を帯びた赤色型の個体がいる。虹彩は黄色で頭部には羽角がある。天敵などが近づくと、羽角を立て、体を細くして木などに擬態する。ふしよのほぼ全体が羽毛に覆われているが足指にはない。翼の羽には消音機能が備わっており、羽音を立てずに飛び回り、飛翔する夜行性の昆虫類を足でつかみとる。おもに森林に生息し、日中は木の枝上や樹洞内などの暗いところで休息している。ユーラシア大陸のウズリーチから中国、東南アジア、インドにかけて分布し、国内には九州北部から北海道にかけて夏鳥として渡来し繁殖する。繁殖期は5—6月で、樹洞やキ

参考文献

叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

ツツキの古巣を利用して営巣する。鳴き声は「ブッ キョッ コー」と3音で鳴く独特なもので、「ブッ・ポウ・ソウ」と聞こえるこの声を「仏法僧」とききなす。「姿のブッポウソウ」に対し「声の仏法僧」と呼ばれている。鳴き声は夕方から夜半にかけてと早朝によく聞かれ、深夜にはあまり鳴かない。繁殖地に渡ってきた直後には、昼間に鳴くこともある。1回の繁殖で4—5個の卵を産み、抱卵期間は約24日。ふ化後、約3週間で巣立つ。全国繁殖分布調査では、1970年代以降、確認地点が減少を続けており、個体数が減少していると思われる。

県内での生息地域・生息環境

中国山地のブナ帯を主とする豊かな自然環境が残存する森林に、わずかに生息しているが、夜行性のため確認されにくいこともあり、県内の生息状況や分布については不明な点が多い。県東部や西部には、本種の鳴き声が比較的良好に聞かれる山地がある。なお、近年の観察情報のほとんどは春の渡りの時期（5—6月上旬）の記録であり、繁殖期の生息状況に注意する必要がある。

存続を脅かす原因

森林の伐採や開発、営巣木となる大木の減少、越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。餌資源となる甲虫などの昆虫類の減少。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis cyanocollis Vieillot, 1819

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団



選定理由

近年、急激に個体数が減少していると考えられる。県内全域では自然木や橋梁の営巣が多いと考えられるため、森林伐採などによる繁殖に適した営巣木の減少や橋梁の工事などで営巣環境が不足することにより、絶滅のおそれがある。

概要

本種（亜種）は、ブッポウソウ科に属し、全長は30cm程度。金属光沢のある青色の羽は、光の具合で緑色にも見える。嘴と脚は鮮やかな赤色。初列風切の基部近くは青味のある白色で、飛翔時に翼を広げると大きな白斑となって見えるのが特徴。「ゲェ ゲゲゲ」と濁った声で早口で鳴く。本種はアジア北東部からオーストラリアにかけて広く分布し、国内には本亜種が夏鳥として渡来し、本州、四国、九州で繁殖し、冬季には東南アジアへ渡る。食性はおもに昆虫食で、大型の甲虫、セミやトンボなどを好む。周囲を見渡せる高い木の上や電柱などにとまって餌を探し、飛翔しながら採食して再び同じところに戻ってくる姿をよく見かける。繁殖期は5—7月で、大型ツツキ類やムササビなどの古巣、橋梁などの人工物の隙間を利用して営巣する。西日本で繁殖する個体群は、以前は木製電柱に大型ツツキ類が空けた古巣を利用して営巣していたが、電柱がコンクリート製へと変更されたことで、営巣場所が失われ、生息数が激減し

参考文献

福井智里 (2014) ブッポウソウの子育てにおける雌雄の役割分担. (オンライン) https://www.konkougakuen.net/ssh%20hp/2014bio_buppousou.pdf. 閲覧日2025-7-22.
飯田知彦 (1992) 電柱を営巣場所にするブッポウソウ *Eurystomus orientalis* の繁殖分布. Strix, 11: 99-108.
飯田知彦 (2006) ブッポウソウの巣箱かけプロジェクト. BIRDER, 20(6): 43-45.
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.

たことが問題となった。中国地方では、巣箱による保全が行われることで個体数が増加した地域がある。1回の繁殖で3—5個の卵を産む。抱卵は雌雄が交代で行い、22—23日間で雛がふ化する。その後、約26日程度で巣立つ。育雛中に貝殻や金属片などを巣内に持ち込む習性があるほか、巣内にはペリットや甲虫の死骸などが貯まっている。

県内での生息地域・生息環境

以前は中山間地域を中心に県内全域で生息していたが、近年はごく限られた地域でのみでしか生息が確認されていない。おもに伐採地周辺や林縁にある大型ツツキ類の古巣や橋梁の隙間などでの営巣が観察されている。近隣の広島、岡山、鳥取各県では電柱に巣箱を取り付けるなどの保全活動により生息数が増加に転じたとされるが、島根県内での取り組みは一部の限られた地域で行われているのみである。

存続を脅かす原因

営巣木（大型ツツキ類やムササビなどの古巣がある大木）の朽壊、橋梁の架け替え工事などによる営巣環境の消失。餌資源となる甲虫などの昆虫類の減少。越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。カメラマンによる過剰な接近など繁殖に影響を与えるような行為。

(執筆: 星野 由美子)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ブッポウソウ目カワセミ科

ヤマセミ

Megaceryle lugubris lugubris (Temminck, 1834)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



選定理由

本種(亜種)の個体数は多くなく、営巣に適した土壁が必要であるなど、特定の環境を要するため、生息適地は限られている。特に垂直に近く、ある程度の面積がある土壁は、人為的に造成された場所が多く、短期間で改変されることがある。自然な土壁であっても安定的に存続することは少ないと考えられ、今回の改訂にあたって2023年に実施した巣穴調査では20年前に巣穴があった壁面の約67%が消失あるいは営巣に適さない状態になっていた。

概要

本亜種はカワセミ科ヤマセミ属の留鳥で全長約38cm。国内に生息するカワセミの仲間ではもっとも大型。体の上面は白黒の鹿子模様であり冠羽が目立つ。種としては、インドシナ半島北部、中国南部、朝鮮半島、日本に分布する。国内には、本亜種が九州、四国、本州に生息するほか、北海道に亜種エゾヤマセミが分布する。山地の溪流や湖に留鳥として生息し、「ケツ」、「キュツ」など1声ずつ区切って鳴く。繁殖期には「ケツケツケツ」「キュルルルル」と雌雄で鳴き交わす。1年を通してつがいごとになわばりを持って分散し、おもに山地の上流から中流に生息する。積雪期に下流域に漂行する個体もいる。食

参考文献

神保健次(1992) 巣穴作りに適した足ーヤマセミー。週間朝日百科 動物たちの地球, 27: 68-71. ・叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京。
 笠原里恵・加藤和弘(2007) ヤマセミ *Ceryle lugubris* の育雛に釣り人の存在が与える影響。日本鳥学会誌, 56(1): 51-57。
 植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京。
 中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪。

性は、おもに魚類を食べるが、甲殻類や水生昆虫も捕食する。空中や枝などから勢いよく水面にダイビングして魚を捕るため、水深が50cm以上の場所が餌場となることが多い。繁殖期は3-8月で、垂直に近い土の壁に深さ90-140cmくらいの穴を掘って営巣するが、古い巣を再利用することもある。1つの崖には1-数個の穴が掘られていることが多い。巣穴の奥深くに卵を産み、親鳥が交代で抱卵する。ふ化後、雛は約1カ月で巣立つ。全国繁殖分布調査では1970年代以降、分布は縮小を続けている。

県内での生息地域・生息環境

留鳥としておもに山地の溪流から中流域、湖沼などに広く生息が認められるが、生息密度は減少していると考えられる。山地の粘土層(赤土)の営巣壁は、河川などの水辺からかなり離れた場所にも存在する。斐伊川・神戸川水系で調査した結果では、営巣に利用する土の壁は、高さが5m以上で、傾斜は80度以上のものがほとんどであった。

存続を脅かす原因

河川改修や開発などによる生息適地の減少。溪流釣りなどによる人の影響で雛への給餌が減少することも知られている。また営巣壁は時間の経過とともに植生に覆われたり、壁面が崩落したりすることなどで消失することが多い。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ハヤブサ目ハヤブサ科

ハヤブサ

Falco peregrinus japonensis Gmelin, 1788

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)



選定理由

海岸部における生態系の頂点に立つ重要な種であるが、県内における繁殖個体数は多くはない。県内の海岸部は、北海道や三陸海岸に次ぐ国内有数の繁殖地域である日本海側地域に含まれるが、近年、繁殖地付近への人の立ち入りなどによる生息環境の悪化や、有害化学物質の蓄積などによる繁殖率の低下などが危惧される。

概要

種としては、ほぼ全世界に分布し、このうち亜種ハヤブサは東アジア北部と日本に分布する。本県には、留鳥として生息し、人の近寄れない海岸や山の断崖の岩棚に営巣する。羽ばたきと滑翔を交互に行い、直線的に高速で飛翔し、ヒヨドリなどの中型の小鳥類を中心に捕食する。飛翔中の鳥の上空から翼をすぼめて急降下し、脚で蹴り落とし捕らえることが多い。繁殖期は3月下旬から4月上旬で、岩だなの平坦部に直接3-4個の卵を産む。約1カ月で雛がかえり、40日ほどで巣立つ。冬季など、非繁殖期には全国各地の海岸や平野部などに漂行し、特に広い水面や平

参考文献

五百沢日丸(2004) 日本の鳥550 山野の鳥 増補改訂版, 383pp. 文一総合出版, 東京。
 黒田長久監修, C.M.ペリンズ・A.L.A.ミドルトン編(1986) 動物大百科7 鳥類, 194pp. 平凡社, 東京。
 植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 府中。
 山田一太(2023) 広島県におけるハヤブサの営巣数の変化と営巣環境。Bird Research, 19: S23-S26。

坦地のある環境を好む。本県では、冬季に水田地帯などで漂行してきた個体が比較的良好に確認される。環境省の全国鳥類繁殖分布調査では、1970年代に比べ2010年代には確認されたメッシュがかなり拡大していることが明らかになっている。

県内での生息地域・生息環境

繁殖個体は、切り立った岩場のある海岸部に多く、島根半島や隠岐諸島の海岸部で繁殖地が確認されている。近年になって、内陸部においても繁殖が確認されたが、これはまれなケースである。一方、非繁殖期に漂行する個体は、斐伊川など大河川の河口部や平野部で多く見られ、冬季に個体密度が増加する。

存続を脅かす原因

繁殖地付近への釣り人などの立ち入りによる繁殖障害や、農業等に含まれる有害化学物質の蓄積により卵殻が薄くなることによるふ化率の低下など。

(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

スズメ目ヤイロチョウ科

ヤイロチョウ

Pitta nympha Temminck & Schlegel, 1850

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):松田均

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



選定理由

本種が好む湿潤な森林環境が伐採などにより減少するとともに、営巣好適地である倒木や低木の茂みが森林管理の変化やシカによる下層植生の食害などにより減少している。また、カメラマンによる過剰な接近や繁殖地への立ち入りといった人為的な影響も懸念される。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種に指定されている。

概要

本種はスズメ目ヤイロチョウ科に属し、美しい色彩と「ホヘン ホヘン」と2声ずつ大きな声で繰り返して鳴く独特のさえずりで知られている。さえずりの期間はごく短く、2週間程度とされている。全長は約18cmで、鮮やかな緑色の背、青色の翼と腰、赤色の腹から下尾筒、黒色の顔、茶色の頭部を持つ特徴的な外見をしている。飛ぶと初列風切の白斑が目立つ。脚は比較的長く、尾羽は短い。日本や中国南東部には夏鳥として渡来して繁殖し、非繁殖期にはインドや東南アジア各地で越冬する。国内では本州中部から四国、九州に夏鳥として見られ、温暖な地域の森林に生息し、繁殖期には特に湿潤な落葉広葉樹林を好むとされる。食性は、昆虫類やミミズを好み、地上を歩きながら中や落ち葉の下に潜む小動物を採食することが多い。繁殖期は5-7月で、巣は大木の

参考文献

林正敏 (1982) 長野県におけるヤイロチョウの繁殖初記録. *Strix*, 1: 123-124.
 叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥. 719pp. 山と溪谷社. 東京.
 中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社. 大阪.
 植田睦之・若本富雄・中村豊・川崎慎二・今野 伶・佐藤重穂・高 美喜男・高嶋敦史・滝沢和彦・沼野正博・原田 修・平野敬明・堀田昌伸・三上かつら・柳田和美・松井理生・荒木田義隆・才木道雄・雪本晋賢 (2014) 全国規模の森林モニタリングが示す5年間の鳥類の変化. *Bird Research*, 10: F3-F11.
 植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会. 東京.

(執筆: 星野 由美子)

太い枝の股や根元の隙間、倒木周辺のくぼみなどに、落ち葉や小枝を用いてドーム状に作る。1回の繁殖で4-6個の卵を産む。抱卵は雌雄が交代で行い、約2週間までふ化する。その後、14-16日ほどで巣立つ。全国鳥類繁殖分布調査では、1990年代に比べて2010年代で観察例は増加した。

県内での生息地域・生息環境

県内でのヤイロチョウの確認事例は多くない。しかし、全国鳥類繁殖分布調査によると、県内においても2016年以降の調査では、2000年以前の確認数より増加している。かつては龍頭が滝や鱒淵寺周辺などの優れた照葉樹林が残っている斜面で確認されることが多かったが、近年は、三瓶山周辺などの夏緑樹林とスギ・ヒノキなどの植林がモザイク状になっている森林で繁殖期に継続して観察されており、2017、2018年には顕著な抱卵斑があるメス個体が確認されている。

存続を脅かす原因

伐採などに伴う繁殖に適した湿潤な森林環境の消滅、越冬地や中継地における生息環境の悪化。シカの増加などによる森林内の下層植生の急激な変化など。また、営巣地近くへの人の立ち入り、撮影などによる過剰な接近などの行為は繁殖に影響を与える可能性が高く懸念される。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

スズメ目モズ科

チゴモズ

Lanius tigrinus Drapiez, 1828

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):北脇努

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

以前は渡りの途中にまれに見られる旅鳥と考えられていたが、近年6-7月の繁殖期における確認個体数が増えてきており、2023年7月に島根県中央部の里地地域で繁殖が初めて確認された。環境省レッドリストで絶滅危惧ⅠB類に選定されており、国内における繁殖は東北地方の日本海側を中心に推定で160つがい程度とされている。このような希少な鳥類が島根県内で繁殖期に多く確認され、繁殖も確認されたことから新たに選定するものである。

概要

アジア極東部の温帯地域で繁殖し、東南アジアの熱帯地域で越冬する。日本には夏鳥として渡来し、本州の平地や低山地の林縁、果樹園などで繁殖する。国内の分布は局所的で、本州西部では少ないとされている。全長18.5cm、頭から首の後方は青灰色、背から尾羽、翼の上面は赤色

参考文献

有岡英明・岡本智臣・小坂秀樹・内倉康幸・芦明也 (2025) 島根県内におけるチゴモズ *Lanius tigrinus* の繁殖初記録. *Strix*, 41: 67-72.
 田悟和巴・横山陽子・谷口裕紀・柏原 聡・樋口広芳 (2023) 日本海沿岸部におけるチゴモズ *Lanius tigrinus* の分布と個体数. *日本鳥学会誌*, 72(1): 67-76.
 谷口裕紀・原田俊司・柏原 聡・横山陽子・大坪二郎・田悟和巴・樋口広芳 (2020) ジオロケータによる絶滅危惧種チゴモズの渡りルートの推定. *技術広報誌*, 56: 2-3.
 渡辺健三・渡辺貴美恵 (2007) 広島県内におけるチゴモズの繁殖記録. *Strix*, 25: 151-167.

(執筆: 佐藤 仁志)

がかった褐色。胸・腹は白色で、顔には目を通る太い黒線がでる。メスはこの黒線が嘴まで届かず、脇には褐色の横斑が見られる。嘴は黒色、脚は灰黒色。昆虫類を主食とし、モズと同様「はやにえ」もつくる。尾を振りながら「キュー・キュー・ギチ・ギチ・ギチ・ギチ」などとアカモズよりも濁った低い声で鳴く。環境省の第2回および第5回・第6回自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査の比較では、生息確認メッシュ数が48から10へと激減し、生息状況が悪化していると報告されている。

県内での生息地域・生息環境

繁殖地は比較的海岸部に近い里山斜面の混交林で、前面に休耕田が広がっているような環境であり、斜面に生育するノグルミに営巣していた。

存続を脅かす原因

開発などによる繁殖地の生息環境の消失、越冬地・中継地における環境の変化、地球温暖化など。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

スズメ目センニュウ科

ウチャマセンニュウ

Locustella pleskei Taczanowski, 1890

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



選定理由

県内では、少なくとも本土側の島嶼1カ所で繁殖記録があるほか、隠岐諸島の無人島で夏季に観察記録がある。いずれも小さな島で、個体数は非常に少なく、存続基盤はきわめて脆弱である。

概要

全長約17cm。シマセンニュウによく似ているが、体はやや大きめで嘴が長い。さえずりは、「チッチ チョイチョイチョイ」などと聞こえる鳴き方で、シマセンニュウに似るがやや短い傾向がある。日本鳥類目録ではシマセンニュウの亜種とされていたこともあったが、改訂第7版(2012)以降は別種扱いとなっている。本種は、ロシア沿海地方や朝鮮半島、日本の沿岸の島嶼で繁殖し、中国南部からインドシナ半島北部で越冬する。国内では、夏鳥として渡来し、伊豆諸島のほか紀伊半島周辺や九州近海の小島などで繁殖している。海岸に近いササや草地、照葉樹林などに生息する。数百羽が生息している三宅島と筑前沖ノ島を除けば島の面積が狭く、一つの島には数羽から数十羽が生息しているに過ぎないとされるなど分布がきわめて局所的であり、総個体数は少ないと考えられている。干拓による陸地化で消失した繁殖地があるほか、ドブネズミなどの侵入により局所個体群が絶滅しやすい。

参考文献

石本賢治(2009) 島根県におけるウチャマセンニュウの繁殖記録。ホシザキグリーン財団研究報告。12: 343-346。
 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい。東京。
 森茂晃(2023) シマセンニュウの渡りはじめはいつかと遡っていったらウチャマセンニュウの渡りに辿りついた件。2023年度(第37回)日本鳥類標識協会全国大会 講演要旨集。12。
 永田尚志(2008) ウチャマセンニュウ。Bird Research News。5(5): 4-5。
 日本鳥学会(2012) 日本鳥類目録 改訂第7版。438pp。日本鳥学会。三田。

県内での生息地域・生息環境

本土側の島嶼1カ所で2008年に繁殖が確認されている。隠岐では少なくとも2カ所の小島で複数年にわたって繁殖期にさえずりが確認されたり、複数個体が見られたりしており、現在のところ営巣や巣立ち雛などの確認には至っていないが、繁殖しているものと考えられる。いずれの場合も、小さな島の一部分にある草原と灌木が混在するような環境で観察されるが、このような適度な生息環境が維持されるかなど、今後の動向について注意深く見守っていく必要がある。また、近年、繁殖期が終わって間もないと思われる時期に本土側のヨシ原で毎年幼鳥が確認されることが明らかになり、渡りの中継地としての重要性が考えられる。

存続を脅かす原因

県内で繁殖期に確認されている島嶼は小さく限られている上に、繁殖に利用する植生の範囲が限られるなど、存続基盤が極めて脆弱。ネズミ類の侵入や増加、植生の変化などの影響は大きいと考えられ、荒天などの一時的な影響も懸念される。また、本土側の渡りの中継地とみられるヨシ原の縮小や植生遷移などの環境変化がどれほど影響を及ぼすか、まだ解明されているわけではないが、幼鳥の生存率などに影響する可能性も考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カモ目カモ科

ヒシクイ

Anser fabalis (Latham, 1787)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)



選定理由

本種の集団渡来地は東日本に片寄っており、それも局地的である。琵琶湖より西の集団渡来地は斐伊川水系だけであり、特に斐伊川下流部や河口部で集中してみられる。国内に渡来するヒシクイは亜種オオヒシクイ、亜種ヒシクイ、亜種ヒメヒシクイの3亜種が知られているが、ほとんどは亜種オオヒシクイと亜種ヒシクイの2亜種で占められている。しかし、斐伊川水系に渡来するヒシクイはこれら2亜種に比べ体サイズが一回り小さい個体が多く、中にはマガンと同サイズの個体も見られる。なお、亜種オオヒシクイと考えられる大型の個体も数割含まれるが多量ではない。当地に渡来するヒシクイは、東日本に渡来する個体群とは繁殖地や渡来ルートが異なる可能性が高く、2010年4月には日本海を北上して大陸へ直接渡るルートが確認されるなど、学術的にも注目される。

概要

1971年に国の天然記念物に指定され保護されてから、その数が回復傾向にあるが、渡来地は局地的。現在、国内には東北地方を中心に約2万羽が渡来している。国内に渡来するヒシクイを亜種レベルでみると、

参考文献

建設省中国地方整備局出雲工事事務所監修(1997) 斐伊川水系の鳥類。171pp。社団法人中国建設弘済会。広島。
 林野庁編(1969) 鳥獣行政の歩み。財団法人林野弘済会。東京。
 佐藤仁志(2015) 松江市史 通史編1 自然環境・原始・古代。842pp。松江市。松江。
 佐藤仁志編(1985) 宍道湖の自然。179pp。山陰中央新報社。松江。

タイガ地帯をおもな繁殖地とする亜種オオヒシクイと、ツンドラ地帯をおもな繁殖地とする亜種ヒシクイの2亜種が渡来しており、亜種オオヒシクイの方が多く渡来数の約2/3、亜種ヒシクイが約1/3といわれている。

県内での生息地域・生息環境

集団で定期的に渡来するのは、以前は斐伊川中流から下流部であったが、近年は河口部一帯を中心に渡来する。藪や餌場はおもに斐伊川の河川敷内で、中州を藪とし牧草やツルヨシの根などを餌としていたが、近年は斐伊川河口周辺の水田地帯を餌場とするようになってきている。斐伊川水系に渡来するヒシクイは、2015年頃までは100羽前後で推移していたが、その後増加傾向にあり近年は400羽前後にまで増加してきている。

存続を脅かす原因

大規模な圃場整備に伴う乾田化など餌場環境の悪化、伝染病の蔓延など。

(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カモ目カモ科

カリガネ

Anser erythropus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



鳥類

選定理由

世界的希少種で、国内にも少数が渡来する。宍道湖西岸域を中心に、一時期は毎年のように1~数羽の渡来が確認されていたが、近年は記録されない年もある。越冬ではなく一時的な出現とみられる場合も多く、安定していない。

概要

全長約58cmの小型のガン類で、マガンより一回り小さい。マガンによく似ているが、嘴が小さくて短く、ピンク色味が強い。成鳥では額の白色帯が嘴の基部と同じ幅で頭頂まで達しており、眼の周りに黄色の明瞭なリングがある。全世界で数万羽と推定されており、2つの個体群があるとされる。一つはスカンジナビアからヨーロッパロシアで繁殖し、中東南部から中央アジアで越冬する個体群で、もう一つはアジア側ロシアで繁殖し、日本、中国、朝鮮半島などで越冬する。中国の東洞庭湖がもっとも大きな越冬地とされる。1980年代後半から1990年代前半には中国で60,000~70,000羽が生息していたと推定されていたが、2011年には14,000~19,000羽、2019年には4,190羽と急激に減少している。国内では、北海道や宮城県のほか、秋田県、新潟県、石川県、島根県などで記録があり、マガンの渡来地に重なる。雁の里親友の会による宮

参考文献

池内俊雄・澤祐介(2021)世界的に減少も、日本の越冬個体数が増加 希少ガン類のカリガネ 本格的な研究スタート、北海道野鳥だより、205: 4-6。
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類、250pp。ぎょうせい、東京。
北脇努(2004)本号の表紙。スベキヨラム、99: 1。
PEIRU AO, XIN WANG, DIANA SOLOVYEVA, FANJUAN MENG, TOSHIO IKEUCHI, TETSUO SHIMADA, JINYOUNG PARK, DALI GAO, GUANHUA LIU, BINHUA HU, TSEVEENMYADAG NATSAGDORJ, BOFU ZHENG, SERGEY VARTANYAN, BATMUNKH DAVAASUREN, JUNJIAN ZHANG, LEI CAO & ANTHONY D. FOX (2020) Rapid decline of the geographically restricted and globally threatened Eastern Palearctic Lesser White-fronted Goose *Anser erythropus*. Wildfowl (Special Issue 6): 206-243.

城県における越冬個体数の推移では、2012年以降増加傾向で2019年の冬には300羽以上になったとされる。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として、おもに宍道湖や中海の周辺で1~数羽が観察されている。1999年以降は毎年のように観察されているが、記録がない年や越冬期の一時期に限られる年もある。特に宍道湖西岸域でマガンの群れに混じって観察されることが多いが、一時的な渡来の場合にはマガンに酷似する本種を発見しきれず、実態より記録が少ない可能性も考えられる。採食地はマガンと同じくおもに刈り取り後の水田で、時は宍道湖の湖面のほか斐伊川の中州の場合もあると考えられる。2004年4月には出雲市で渡りの途中に渡来したと思われる25羽の記録がある。

存続を脅かす原因

採食地は非耕作期の水田であることが多いが、乾田化や作付けの変化などによって利用可能な場所が減少傾向にある。罾や休息地あるいはその近くが釣りやレジャーなどで使用される場所となる可能性も考えられるほか、観察や撮影などで過剰な接近や追いかけといった人為的な影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カモ目カモ科

オオハクチョウ

Cygnus cygnus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本県ではコハクチョウに比べ渡来数が少なく、渡来状況も不安定であることから、動向を注意深く見守っていく必要がある。かつてはマコモが生育している水辺で過ごす個体群が見られていたが、現在は絶えてしまっている。

概要

国内に渡来するハクチョウ類は、主としてオオハクチョウとコハクチョウの2種で、令和6年度の環境省のガンカモ類生息調査では、オオハクチョウが27,607羽、コハクチョウが44,900羽数えられている。本種は、コハクチョウより一回り大きく、全長約1.4m、翼開長約2.2mで、日本に生息する鳥類の中でもっとも大きいものの一つ。コハクチョウよりも嘴の黄色の部分が高く、その先端が三角形にとがり黒色部に食い込むのが特徴。繁殖地は、ユーラシア大陸のタイガ地帯で、コハクチョウが繁殖するツンドラ地帯よりも南部に位置する。国内には冬鳥として渡来し、越冬地は北海道東部から関東にかけての太平洋側で、特に福島県以北に数が多い。国内で越冬しているオオハクチョウは、沿岸域ではアマモ、内陸湿地ではマコモやレンコン、湿地周辺の草本類を採食し、農地では水田の落ち穂やトウモロコシの落穂などを食べる。ただし、水田

がおもな採食地になっているコハクチョウに比べると、自然の水辺環境で採食することが多いようである。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として県内に渡来するハクチョウ類の大半はコハクチョウで本種は少ない。おもに宍道湖や中海の周辺に見られ、数羽から十数羽の本種だけの群れで見られる場合もあるが、コハクチョウの群れに1~数羽が混じることが多く、水田で採食していることが多い。かつてはマコモの群落があった神戸川河口部で群れが見られたが、河川工事の影響などから近年は見なくなっている。神戸川では、近年は下流部で観察されることがあるが、長期間の滞在はしていないと考えられる。県中部や西部にも一時的に渡来することがあり、江の川の中流部で観察されたこともある。隠岐諸島にも渡来することがあり、越冬とみられる情報もあるが、ほとんどが渡りの途中の一時的な滞在と考えられる。

存続を脅かす原因

河川工事などによるマコモなどの餌の減少といった生息環境の悪化。近年の採食地は非耕作期の水田の場合が多いが、乾田化や作付けの変化などによって採食場所が減少傾向にある。

(執筆: 森 茂晃・佐藤 仁志)

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター(2025)第55回ガンカモ類の生息調査報告書、119pp。環境省自然環境局生物多様性センター、富士吉田。
神山和夫(2015)オオハクチョウ、Bird Research News、12(1): 4-5。
島根県(2025)令和6年度ガンカモ類生息調査の結果(主要地域)、平成4年度以降の主要地域の調査結果一覧(PDFファイル)神戸川、https://www.pref.shimane.lg.jp/industry/norin/choujyu_taisaku/gan-kamo.data/R6kando.pdf。(2025年10月28日閲覧)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カモ目カモ科

アカツクシガモ

Tadorna ferruginea (Pallas, 1764)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



鳥類

選定理由

本県は、朝鮮半島と近い位置にあることなどから、本種の渡来が比較的多いと考えられる。過去には、宍道湖西岸域に毎年のように渡来していたことがあり、貴重な地域と考えられる。近年は渡来が確認されなかった年や、渡来しても一時的で越冬しない年もあり、不安定な状況が続いている。

概要

全長約64cmで、ツクシガモとほぼ同大の大型のカモ類。全身橙色だが頭部は白色に近い。嘴と脚、尾羽と翼の先端は黒く、翼を広げると白と黒のコントラストが目立つ。オスには頸部に黒色の輪があるが、メスにはない。ユーラシア大陸中南部とアフリカ大陸の一部に分布し、東アジアでは朝鮮半島や中国南部、日本などに冬鳥として渡来する。ただし、国内に渡来する数は少なく、不定期な飛来と考えられる。環境省のガンカモ類の生息調査によれば、1982年には全国で34羽となっているが、それ以降は2013年の17羽や2023年の12羽以外は数羽で、記録されていない年もある。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として宍道湖や中海の周辺、神西湖など県東部で確認されることが多いが、一時的な通過とみられる場合もある。1979年以降ほぼ毎年少数が渡来していたとされるが、2004年度以降は不安定な渡来状況が続き、記録がない年もある。渡来したほとんどの年は1羽から数羽だが、1987年には斐伊川河口に10羽の群れが渡来したことがあり、2024年には県東部で9羽の記録がある。宍道湖や中海の周辺では、水田に飛来して落ち穂や青草などを採食する姿をよく見る。塘や休息地は水面に囲まれた砂州を利用することが多い。群れで渡来したときは独自で行動することが多いが、1羽など数が少ない場合にはマガンの群れと行動を共にすることもある。県西部では記録があるが、中部は参照することができた範囲の文献には記録が見当たらなかった。隠岐諸島は古い文献の記載のほか、近年の確認例がある。

存続を脅かす原因

採食地は非耕作期の水田であることが多いが、乾田化や作付けの変化などによって利用可能な場所が減少傾向にある。塘や休息地あるいはその近くが釣りやレジャーなどで使用される場所となる可能性も考えられるほか、カメラマンによる過剰な接近や追いかけといった人為的な影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃・佐藤 仁志)

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター (2017) 第47回ガンカモ類の生息調査報告書, 196pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
 環境省自然環境局生物多様性センター (2025) 第55回ガンカモ類の生息調査報告書資料編, 80pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
 環境省自然環境局野生生物種保存推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
 公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2025) 島根県内におけるカモ科鳥類のカウント結果報告 (2023年度). ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 1-13.
 日本野鳥の会島根県支部 (1997) 第51回愛鳥週間「全国野鳥保護のついで」記念誌「しまねの鳥」, 198pp. 島根県農林水産部森林整備課, 松江.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツル目クイナ科

クイナ

Rallus indicus Blyth, 1849

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種は、草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、観察されにくいことから、生息状況が十分に把握されていないが、個体数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少しており、気づかぬうちに数を減らしている可能性がある。

概要

全長約29cm。キジバトより少し小さく、尾羽は短い脚は長い。体の上面は黄褐色で、羽根の黒い軸斑が縦斑に見える。顔から腹部の中央は青灰色で、脇腹から下腹部には白と黒の横縞がある。細長い嘴は下嘴が赤く、眼も赤い。ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯などで繁殖し、亜寒帯のものはインド、中国南部、インドシナ半島に渡って越冬する。国内では北海道や東北地方北部、関東の一部などで繁殖し、中部以南などでは冬鳥として見られる。湖沼などの水辺の草原やヨシ原、水田や休耕田などに生息するが、草むらに生息するため、姿を見ることは容易ではない。半夜行性とされるが、湿地を歩いたり泳いだりしながら、昆虫類、両生類、魚類、甲殻類などの動物質のほか、草の種子なども食べる。警戒心が強く、ちょっとした物音などにもすぐ反応して隠れる。単独あるいはつが

いで生活し、雛を連れて育てている時期以外は群れをつくることはない。なわばり意識は強く、繁殖地でも越冬地でも一定の範囲を縄張りとして構え、ほかの個体が侵入してくると追い払うという。全国鳥類越冬分布調査では、1980年代と比較して2010年代は本州の太平洋側と四国地方で分布が拡大しており、中国地方では減少していたとされる。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として水辺の草原やヨシ原などで観察されるが、草の茂みに潜んでいることが多く、生息状況は十分に把握できていないと考えられる。記録や観察例は、県東部の宍道湖や中海、神西湖の周辺などのほか、県西部の益田市などある程度限られているが、ほかの地域にも生息していると思われる。隠岐諸島では古い採集記録があるほか、いくつかの文献に記載がある。2020年から宍道湖グリーンパークで実施しているセンサーカメラによるモニタリング調査では、10月から5月にかけて毎年確認されており、夜間ではなく日中に行動する様子が記録されている。

存続を脅かす原因

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息適地の減少が考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

参考文献

中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.
 植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年, 170pp. パードリサーチ・日本野鳥の会, 東京.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツル目クイナ科

バン

Gallinula chloropus chloropus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



選定理由

以前は普通に姿が見られていた宍道湖周辺などで、近年はその機会が減り、特に雛連れを見ることが極端に少なくなった。従って、生息数が減少している可能性が考えられるが、県内における生息状況の実態は不明である。このままでは気づかないうちに絶滅に瀕する事態になりかねず、注意喚起の意味も含めて選定する。

概要

全長約32cmの中型のクイナのなかま。雌雄同色で、成鳥は額板から嘴にかけて赤く、嘴の先端は黄色。体は黒く側面に白斑が並ぶほか、下尾筒の左右は白斑状に見え、警戒時には見せつけるような行動をする。種としては、オーストラリア区を除く世界中の熱帯から温帯にかけて分布し、温帯のものは南方に渡って越冬する。国内では、本亜種が北海道や本州北部では夏鳥、関東地方以南では留鳥として生息する。湖沼や河川ではヨシやガマが生育する水辺、水田やハス田などの湿地に生息する。物音や人影に敏感で、草むらにすぐ隠れるが、クイナなどに比べると開けた場所にも姿を見せる。長い足指には水かきはないが、水面を自由に泳ぐことができる。雑食性で、水辺で水草や甲殻類、オタマジャクシなどを食べるほか、陸上で草の葉や種子、昆虫やミミズなども食べる。繁殖期は4-8月で、つがいが縄張りを構えて分散し、ヨシやマコモ、イ、ガ

参考文献

中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>、304pp. 保育社、大阪。
植田睦之(2022) 全国鳥類繁殖分布調査の結果でゴイサギとバンが狩猟鳥獣から解除に、バードリサーチ ニュース 2022年9月:2【活動報告】、https://db3.bird-research.jp/news/202209-no2/ (2025年6月15日閲覧)
植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年、175pp. 日本繁殖分布調査会、東京。

マなどの草むらや水田に枯れ草を積み上げて皿状の巣をつくる。1巣卵数は5-9個とされるが、種内托卵や一夫多妻のメスたちが一つの巣を共同利用して産卵するため、10個以上になることもあるとされる。早成性の雛は黒い幼綿羽に覆われており、ふ化後2-3日は巣で抱雛されるが、その後は巣から離れる。2016-2021年の全国繁殖分布調査で顕著に減少していることが明らかとなり、2022年に狩猟鳥獣の指定から解除されている。

県内での生息地域・生息環境

宍道湖の西岸域はヨシ原が比較的多くあり、河川敷の草原や河畔林の中に小さな池や水路が点在する斐伊川をはじめ小河川も複数あり、水田地帯が広がるなど、本種の生息が見込まれる様々な環境があり、実際に留鳥として生息している。また、平野部でなくても水田やため池などがあると観察されることがあり、県内に広く分布していると考えられる。隠岐諸島でも留鳥として生息している。

存続を脅かす原因

圃場整備による水路のコンクリート化や乾田化、水田以外の作付けの増加、河川の人工護岸化によるヨシ原などの減少といった生息環境の減少が考えられる。

(執筆者: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツル目クイナ科

ヒクイナ

Zapornia fusca erythrothorax (Temminck & Schlegel, 1849)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧



選定理由

草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、個体数の増減などの生息状況が十分に把握されているわけではないが、数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少している。

概要

全長約23cm。体の上面は暗緑褐色で顔から胸にかけて赤茶色。嘴は黒っぽく、脚は赤い。種としては中国東北部から広東地方、朝鮮半島、日本に生息し、冬季にはミャンマー、インドシナ、タイなどに渡る。国内には亜種ヒクイナと亜種リュウキュウヒクイナが生息する。九州以北で繁殖するのは亜種ヒクイナで、本州中部以南で留鳥だが、北日本のものは冬に暖地へ移動する。河川や湖沼のヨシ原、水田などに生息し、草むらに潜んでいることが多く、姿を現すことは少ない。繁殖期には、おもに夕方から夜にかけて「キョッ キョッ キョッ キョッキョッキョ…」と一声ずつ区切った後に尻下がりに連続して鳴き、その声で存在に気づくことが多い。水辺の草の中に、イネ科植物やヨシなどの葉や茎を利用して皿形の巣をつくる。雛は早成性で、ふ化後まもなく巣を離れ、親に連れられて歩く。餌はおもに動物質で昆虫類が多く、両生類や草の種子も食べる。全国繁殖分布調査報告書では、1970年代から1990年代にかけて特に分布域

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類、250pp. ぎょうせい、東京。
森茂晃(2022) 宍道湖グリーンパークのピオトーブ池におけるヒクイナの冬季の記録、ホシザキグリーン財団研究報告、25: 285-287。
中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>、304pp. 保育社、大阪。
植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年、175pp. 日本繁殖分布調査会、東京。
渡辺美郎(2009) ヒクイナ、Bird Research News、6(11): 4-5。

の北側で記録メッシュ数が減少したが、2010年代には特に東日本で分布が増加していた。同報告書では、調査が進んだことも寄与していると考えられるが、分布や個体数が回復傾向にあることから、環境省レッドリスト2014で絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧Ⅰ類になったとしている。本種(亜種)の生息は、ヨシ原など湿地性植物の面積と密接に関わっており、その生育面積が減少すると生息状況が悪化する可能性が示唆されている。

県内での生息地域・生息環境

繁殖期の鳴き声に特徴があり、夏季の記録が多いが、冬季にも確認されることから、種としては留鳥と考えられる。県内の河川や湖の岸辺のヨシ原や水田などで観察される。隠岐諸島では古い採集記録があるほか、いくつかの文献に記載がある。2020年から宍道湖グリーンパークで実施されているセンサーカメラによるモニタリングでも越冬が確認されており、夜間ではなく日中に行動する様子が記録されている。

存続を脅かす原因

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息環境の減少などが考えられる。また、水田では圃場整備や作付けの変化などで生息に合わなくなってきている可能性もある。

(執筆者: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツル目ツル科

マナヅル

Antigone vipio (Pallas, 1811)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



鳥類

選定理由

定期的な渡来地である鹿児島県など九州地方の県を除けば、本県は四国地方に次いで比較的渡来記録や羽数が多い県の一つである。新たな定期渡来地としての可能性もあるが、現段階では年変動が大きく、定期的な越冬地にはなっていない。集中した越冬地においては感染症による大量死の恐れが高いことなど問題点が多いことから、環境省ではツル類の分散化について対策を進めているところであり、本県においても注意深く見守っていく必要がある。

概要

全長120—153cmで、雌雄同色。成鳥は頭頂から後頸・喉は白色で、眼のまわりの皮膚が赤く大きく裸出しておりよく目立つ。眼先は黒色で、眼の後には灰色斑がある。腹や背は灰黒色。幼鳥は褐色の羽が各部分にある。1—4羽で行動し、「グルー」などともった声で鳴く。東シベリ

参考文献

趙三来・元柄昨(1990) 韓国でのナベヅルの越冬生態に関する研究。慶熙大学鳥類研究所報告第3集: 1-22。
鄭鍾烈編(1987) 朝鮮半島の希少鳥類。48pp。朝鮮大学校自然博物館。小平。
IUCN Red List of Threatened Species. Version 2012.32pp.スイス
黒田長久・森岡弘之監修(1989) 世界の動物 分類と飼育10Ⅱ ツル目。179pp。東京動物園協会。東京。

ア南部、ロシア極東南部のハンカ湖やアムール川流域、中国東北部、モンゴル東北部などで繁殖し、中国南東部の長江下流域、朝鮮半島、日本などで越冬する。国内の定期的な渡来地は鹿児島県だけであり、出水地方には世界の生息羽数の約5割が渡来している。

県内での生息地域・生息環境

渡りの時期に見られることが多く、斐伊川河口部を中心に冬季県内のいくつかの場所で確認記録がある。単独または数羽のことが多く、時々越冬する個体がみられる。出雲市の新内藤川を中心とした地域には、少なくとも20年以上前からマナヅル1羽が周年観察されており、居着いていると考えられる。

存続を脅かす原因

貯や餌場環境の悪化、伝染病の蔓延、カメラマンによる追い回しなど。(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツル目ツル科

ナベヅル

Grus monacha Temminck, 1835

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

定期的な渡来地である鹿児島県など九州地方の県を除けば、本県は四国地方に次いで比較的渡来羽数が多い県の一つである。安定した定期渡来地としての可能性もあるが、現段階では年変動が大きく、定期的な越冬地にはなっていない。集中した越冬地において感染症による大量死の恐れが高いことなど問題点が多いことから、環境省ではツル類の分散化について対策を進めているところであり、本県においても注意深く見守っていく必要がある。

概要

全長91—100cmで、雌雄同色。成鳥は額から頭頂が黒色をしており、眼の上は赤色。頭部から頸は白色で、その他は灰黒色で黒っぽく見える。幼鳥は頭部から顔や頸が淡褐色を帯びる。3—5羽の家族単位で行動し、

参考文献

藤巻裕蔵・花輪伸一・尾崎清明・柚木修・西島房宏・Khrabryi V.K.、Shibnev Y.V.・Starikov, Y.B.・Tupikov, S.V. (1989) ソ連極東ビキン川流域におけるナベヅルの繁殖生態。Strix, 8: 199-217。
IUCN Red List of Threatened Species. Version 2012. 32pp.スイス
清棟幸保(1978) 増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ。898pp。講談社。東京。
高野伸二(2007) フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂版。374pp。財団法人日本野鳥の会。東京。

10羽以上の群れで行動することも多い。成鳥は「クルル」「ククゥ」と鳴く。ロシアのウスリー川東域からアムール川北側地域、中国北東部の一部などで繁殖し、国内には冬鳥として渡来する。国内の定期的な渡来地は鹿児島県が中心であり、ナベヅルの世界の生息数の9割が冬季日本に飛来しており、そのほとんどが鹿児島県出水地方に渡来し越冬している。

県内での生息地域・生息環境

渡りの時期に見られることが多く、冬季斐伊川河口部を中心に県内のいくつかの場所で確認記録がある。単独または数羽のことが多いが、越冬個体が10羽を超えることもある。斐伊川河口部などで時々越冬する。

存続を脅かす原因

貯や餌場環境の悪化、伝染病の蔓延、カメラマンによる追い回しなど。(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チドリ目タマシギ科

タマシギ

Rostratula benghalensis (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



選定理由

県内の生息状況は十分に把握されているわけではないが、観察情報がある場所は限られており、個体数は少ないと考えられる。また、生息に適した湿地環境の減少に伴い、生息数が減少していく可能性がある。

概要

全長約24cm。眼の周りの曲玉模様と胸から背中走る白線がよく目立つ。メスの方が額から胸にかけて赤褐色が鮮やかな羽色で、繁殖期には「コー コー」連続する特徴的な声で鳴く。一妻多夫という繁殖習性を持ち、メスは卵を産むだけで、巣づくりや抱卵、子育てはオスが行う。サハラ砂漠以南のアフリカと南アジアから東アジアに広く分布し、国内では東北地方南部から南西諸島で繁殖記録がある。おもに水田やその周辺環境に生息し、繁殖場所としては特に草丈の低い湿った休耕田を好む。成鳥は繁殖期にはほとんど群れをつくらないが、幼鳥は群れになり、秋から冬にかけては成鳥も幼鳥も群れをつくる傾向がある。秋に稲刈りなどで水を落とした田はタマシギの生息に適さず、水路やほかの地域に移動するとされる。雑食性で、昆虫やミミズ、甲殻類、カワ

参考文献

日高敏隆監修(1996)日本動物大百科 第3巻 鳥類Ⅰ. 182pp. 平凡社. 東京.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい. 東京.
Katayama N, Odaya Y, Amano T & Yoshida H (2020) Spatial and temporal associations between fallow fields and Greater Painted Snipe density in Japanese rice paddy landscapes. *Agriculture, Ecosystems & Environment* 295: 106892.
小田谷嘉弥(2020)タマシギ. *Bird Research News*, 17(11): 3.
福田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会. 東京.

ニナなどの貝類などの動物質のほか、イネ科やタデ科などの種子を食べることもある。全国繁殖分布調査報告書によれば、1970年代から1990年代にかけて記録メッシュ数は79メッシュから42メッシュに減少し、2010年代は49メッシュであった。減少には、圃場の乾燥化と湛水休耕田の減少が関係していると考えられている。

県内での生息地域・生息環境

観察情報はおもに水田地帯で、多くは平野地域に該当する場所である。繁殖期には特徴のある鳴き声で確認されやすいと考えられるが、記録がある場所は限られている。その声を発しない越冬期の情報は特に少なく、県内における生息状況は十分に分かっていないと考えられる。宍道湖周辺では、かつて繁殖期に鳴き声が聞こえていた場所で確認できなくなった水田地帯がある。

存続を脅かす原因

水田地帯では乾田化や作付けの変化などによって生息適地が減少していると考えられる。その上、丈の低い草が適度に生えた湿った休耕田や、それに類似した本種が好む環境は特に安定して存在せず、限られていると考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ミズナギドリ目ミズナギドリ科

オオミズナギドリ

Calonectris leucomelas (Temminck, 1836)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):佐藤仁志



選定理由

夏鳥として渡来し隠岐諸島の無人島などで集団繁殖地(コロニー)が確認されているが、場所によってはその数が減少している。特殊な環境条件に生息し、生息地が局限されているほか、ネズミ類等の侵入により繁殖環境が悪化してきている。

概要

全長49cm、翼開長1.2mの海鳥で、日本のミズナギドリ類でもっとも大きい。雌雄同色で、頭や顔には白地に黒い斑点がある。翼の正面は黒褐色で、淡い羽縁がある。オスはメスよりも高い鳴き声を出す。日本近海などの島で繁殖し、海洋をおもな生息場とする。昼間は、魚群を求めて群れで海上を飛び回り魚を捕食し、夜間に巣に戻る。2-3月頃に集団繁殖地に飛来し、6-7月頃地中に2mほどの巣穴を掘って集団で繁殖する。穴の奥に1卵を生み、雌雄で抱卵・育雛する。10月から12月上旬には島を離れ、越冬のためにフィリピン近海などまで南下する。

参考文献

井上裕紀子・出口智広・越智大介・綿貫豊(2013)オオミズナギドリの繁殖における親鳥の給餌行動と雛の成長. *日本生態学会誌*, 63(1), 13-22.
越智大介・出口智広・井上裕紀子・綿貫豊(2012)オオミズナギドリの繁殖における親鳥の給餌行動と雛の成長. *日本鳥学会誌*, 61(2), 261-269.
岡奈理子(2004)オオミズナギドリの繁殖島と繁殖個体数規模および海域表層水温との関係. *山階鳥類学雑誌*, 35(2): 164-188.
前迫ゆり(2005)土中営巣性海鳥オオミズナギドリと植生との関係. *植生情報*, 9: 48-55.

県内での生息地域・生息環境

日本海の海上上空を集団で飛翔し、魚の群れを見つけて捕食する。隠岐航路などから集団で飛翔する本種の群れを見ることがある。本種が繁殖するのは日本海に浮かぶ無人島で、隠岐郡知夫村の大波加島に島根県内でもっとも大きな集団繁殖地がある。このほか、西ノ島町の星神島、隠岐の島町白島にある沖ノ島などの隠岐諸島の無人島で繁殖している。隠岐諸島以外では、益田市高島が繁殖地となっている。これらの集団繁殖地の内、星神島と沖ノ島が国の天然記念物に、大波加島が県の天然記念物に指定されている。

存続を脅かす原因

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食、重油事故など。

(執筆: 佐藤 仁志)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ペリカン目トキ科

ヘラサギ

Platalea leucorodia leucorodia Linnaeus, 1758

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



鳥類

選定理由

県内の渡来数は数羽程度と少ない。もともと本種(亜種)の生息に適した浅く水につかる湿地環境が広がっている場所は少なく限られるため、継続して渡来する存続基盤は脆弱と考えられる。

概要

全長は約83cmでクロツラヘラサギより一回り大きい。本種(亜種)は眼と嘴の間に淡色の部分があり、眼がはっきり見える点でクロツラヘラサギと識別できる。しゃもじ形の嘴は黒く、上面に黄色部がある。体は全体に白いが、繁殖期には後頭部に橙黄色の冠羽を生じ、胸に橙黄色の帯ができる。幼鳥や若鳥は翼の先端が黒く、飛翔時に目立つ。ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国などに3亜種が分布するとされ、国内には本亜種が冬鳥または旅鳥として渡来する。干潟、水田、河川、湖沼などの湿地に生息し、嘴を半開きにして水の中に入れ、横に振りながら、魚類や甲殻類などを捕食する。同じ形状の嘴を持ち、類似した採食生態を持つクロツラヘラサギと混群になっていることもある。

参考文献

深谷治(2021)2019年から2020年に隠岐諸島で確認した鳥類で長期間報告されていない繁殖及び初確認の記録。ホシザキグリーン財団研究報告, 24: 91-94.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編(2014)レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
桑野修(2025)邑南町における野鳥撮影の記録-2008年から2024年-。島根県立三瓶自然館研究報告, 23: 43-48.
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪。

県内での生息地域・生息環境

おもに冬鳥または旅鳥として1羽あるいは数羽程度が観察される。県内には干潟のような広い湿地環境がほとんどないが、水深が浅い砂泥地がある河口部や湖岸、水田などで採食する姿が見られる。県東部には、流入河川の広い河口部と周辺に水田地帯などがある宍道湖や中海があり、県中部や西部に比べて記録が多い。クロツラヘラサギほど頻度は高くないが、越冬することもあり、その場合は若齢個体であることが多いと考えられる。まれな渡来例として邑南町でも記録があるほか、隠岐諸島でも記録があるが一時的な渡来と考えられる。

存続を脅かす原因

国内では干潟などの海岸開発や堤防工事などによって、生息環境は必ずしも良好ではないとされる。県内ではもともと浅く水につかる湿地が広がる生息適地が少ないため、工事などの人為的な変更のほか、植生遷移などによって縮小した場合の影響は大きいと考えられる。また、一時的でも極端な増水あるいは濁水などで生息環境が縮小したり、写真撮影などで過度な接近が繰り返されたりすることによる影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

タカ目ミサゴ科

ミサゴ

Pandion haliaetus haliaetus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 佐藤仁志

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種(亜種)は、魚類をおもな餌とするタカで、海岸部や湖沼周辺を中心に県内に広く分布しているが、営巣地など本種を取り巻く環境が年々悪化してきている。中でも、森林部で営巣木として利用してきたアカマツの大木が、松くい虫のためほとんど枯死してしまったため深刻な状況にあるほか、餌としている魚類に蓄積した有害化学物質の取り込みに伴う蓄積影響も危惧される。沿岸・湖沼・河川部における生態系の頂点に立つ生物で、その環境指標ともなる種であるが、繁殖成功率が高いとはいえない状況にある。

概要

本種は広く世界中に分布する。国内には本亜種が留鳥として生息し、全長55—65cm、翼開長は170cmにも及ぶ。トビよりも翼が細長く、本種の方がスマートに見える。全体的に白っぽく、日本産のタカ類ではもともと白く見える。空中で停空飛翔を行い、急降下して水中にいる魚

を脚の爪で捕らえる。水上に突き出した杭の上などで、捕らえた餌を食している姿がよく見られる。巣は、海岸部の切り立った崖の先端部に作ることが多かったが、近年は山間部の大木の樹上にかかることが多くなった。さらに、近年、営巣木不足から、送電鉄塔など人工の構造物に営巣することもある。

県内での生息地域・生息環境

県内では、海岸や湖沼部を中心に広く生息しており、その生息密度は全国有数の高密度地域と考えられる。特に、中海・宍道湖や神西湖周辺における個体密度が高く、隠岐諸島でもよく見られる。河川沿いに内陸部まで入り込むことがあり、ダム湖など山間部の水域でも見られる。

存続を脅かす原因

松くい虫による営巣木の枯死、釣り人などの海岸営巣部への接近、餌場環境の悪化、有害化学物質の体内蓄積など。

(執筆: 佐藤 仁志)

参考文献

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男(1995)図鑑日本のワシタカ類, 631pp. 文一総合出版, 東京.
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.
佐藤仁志編(1985)宍道湖の自然, 179pp. 山陰中央新報社, 松江.
植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

タカ目タカ科

チュウヒ

Circus spilonotus Kaup, 1847

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類



鳥類

選定理由

ヨシ原などからなる生態系における食物連鎖の頂点に位置し、その豊かさを象徴する種の一つである。そのような本種が安定して生息することが可能な広いヨシ原がある場所は限られており、存続基盤は脆弱と考えられる。絶滅のおそれのある野生動物種の保存に関する法律で国内希少野生動物種に指定されている。

概要

オスは全長約48cm、メスは約58cm。ゆっくりとした羽ばたきと滑空を繰り返しながら飛翔し、翼をV字型に保って低空を滑翔するのが特徴。羽色には個体差が多く、全体に茶褐色の個体、頭部から翼の前縁部にかけてクリーム色の個体、淡い褐色で胸から腹部に縦斑があり翼の覆羽が青灰色で尾羽が灰褐色の個体などさまざま。バイカル湖付近からウスリー地方、モンゴル、中国北東部、日本などで繁殖し、日本や台湾、ボルネオ、フィリピン、東南アジア、中国南部などに渡る。国内では、北海道のほか、本州や九州で局地的に繁殖しており、日本野鳥の会が2018—2020年に北海道全域を対象に繁殖分布調査を実施し、本州などの繁殖状況についてヒアリングを実施した結果では136つがいと報告

参考文献

深谷治 (2021) 2019年から2020年に隠岐諸島で確認した鳥類で長期間報告されていない繁殖及び初確認の記録。ホシザキグリーン財団研究報告, 24: 91-94.
平野利明 (2010) チュウヒ. Bird Research News, 7(5): 4-5.
環境省自然環境局野生生物種保存推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい, 東京.
日本野鳥の会 (2020) プレスリリース: 絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがい数が明らかに ~全136つがい、国内最少のタカ目科鳥類であることが判明~. <https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2020-12-10/>. (2025年6月15日閲覧)
日本野鳥の会島根県支部 (2001) フィールドノート. スペキュラム, 79: 11.

している。越冬期は、北海道や東北地方の生息数は減少するが、本州中部以南のヨシ原などに広く生息する。ネズミや小鳥類などの小動物を捕食し、カエルや魚類、昆虫類を食べることもある。越冬期には、カモ類を中心とした大型の鳥類も捕食し、幅広い食性をしているとの報告もある。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として、河川や湖沼のヨシ原などの広い草原に生息し、農耕地にも飛行して狩りをする。河川敷に広いヨシ原がある斐伊川などでは冬季に複数個体がみられるが、近年は少なくなっていると考えられる。斐伊川流域では、まれに夏季の観察例もあるが、繁殖は確認されていない。隠岐諸島は2000年10月の観察例や2020年4—5月に撮影を伴う記録があるが、一時的な渡来の可能性が高いと考えられる。

存続を脅かす原因

河川敷内の工事などによる広いヨシ原の縮小や消失。生息に適した草原環境からの植生遷移。採餌やねぐらなど高頻度で利用すると考えられる場所では小規模の改変でも影響する可能性があり、長時間あるいは頻繁な観察や撮影などの過度な接近などがあった場合にも影響が懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

タカ目タカ科

ノスリ

Buteo japonicus japonicus Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

県内では、おもに冬鳥として渡来し、各地に見られるが、近年、繁殖が確認された。繁殖地がきわめて限定的であるため、保全の必要性が高く留意する必要がある。また、繁殖の可能性のある地域では、相応の認識と配慮が必要となる。

概要

本種(亜種)はタカ科に属し、全長は約55cm。翼を広げると1m以上になるトビよりやや小型の猛禽類。雌雄年齢に関係なく羽色や模様は個体差がある。成鳥の頭部から背は淡褐色から黒褐色。頸から胸は白っぽいものから淡褐色のものがある。腹から脇腹にかけて茶褐色の部分がある。翼を広げると翼下面は白っぽいものから淡褐色のものまで個体差があるが、風切はすべての個体に横斑があり、翼角部分は暗褐色をしている。本種(亜種)はユーラシア大陸の中央部分から、アフリカ南東部、東南アジアまで広く分布している。国内では、おもに本州中部以北で繁殖し、留鳥。九州、四国、中部以南では冬鳥として越冬するなど広範囲に生息している。西日本での繁殖は局所的。平地から山地の林や草原、農耕地、河原などさまざまな環境に生息する。雌雄ともにディスプレイ飛行中に「ピーー」と尻下がりのゆったりした声を出す。警戒時も同様の声を出す。きつくと「ピー」と短く鳴くこともある。食性は動物食で、ネズ

参考文献

叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥. 719pp. 山と溪谷社, 東京.
Nakahara T., Nagai K., Iseki F., Yoshioka T., Nakayama F., & Yamaguchi N. M. (2022) GPS tracking of the two subspecies of the Eastern Buzzard (*Buteo japonicus*) reveals a migratory divide along the Sea of Japan. Ibis, 164(4): 1192-1200.
中原亨 (2024) 高い生物多様性を内包する里山環境の変遷を追う: 指標種ノスリを用いた検証と予測. (オンライン) <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19K15869/>. 閲覧日 2025-8-16.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.

ミなどの小型哺乳類、昆虫、両生爬虫類、鳥類などを捕食する。樹上や空中でホバリング(停空飛翔)を行い、獲物を狙って急降下して捕食する。非繁殖期は、農耕地などの開けた一定の採食場に出てきて狩りを行う。繁殖期は4—7月で、大木の樹上に枯れ枝などを積み重ねて巣を作り、毎年、同じ巣で繁殖することが多い。1回の繁殖で2—3個の卵を産み、おもにメスが抱卵を行い、33—35日ふ化する。その後、約6週間で飛べるようになり、さらに1カ月半から2カ月で独り立ちする。全国鳥類繁殖分布調査によると、1970年代以降、分布は拡大傾向にあり、これまで繁殖の少なかった低地や西日本でも繁殖例が増えている。

県内での生息地域・生息環境

県内には、多くが冬鳥として渡来し、平地から山地の林や草原、農耕地、河原などさまざまな環境で生息する。近年、農耕地が近隣にある標高の低い山地で繁殖が確認されている。

存続を脅かす原因

森林伐採や開発による生息地の減少、耕作放棄地の増加や農薬の使用による食物資源の減少。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

フクロウ目フクロウ科

オオコノハズク

Otus semitorques semitorques Temminck & Schlegel, 1844

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 秦智秋

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



鳥類

選定理由

留鳥として生息し、山地で観察されることがあるが、情報がきわめて少なく生息数は多くないと考えられる。しかし、夜行性のため生息状況はよくわかっておらず、気がつかないうちに絶滅に瀕してしまう可能性がある。

概要

本種はフクロウ科コノハズク属に分類されるフクロウの仲間では全長は約24cm。翼を広げると約56cmになり、コノハズクよりやや大きい。長い耳羽がある。虹彩は橙色で、黄色のコノハズクと見分けられる。体の色は全体に褐色で灰黒色、黒褐色、淡い橙色、白色の斑が複雑に入り混じる。ふしよと足指には羽毛が生えている。種の分布は、日本のほか、ウスリー地方、中国東北部、サハリン、台湾、フィリピン、インドシナ半島などと広い。県内には亜種オオコノハズクが生息しているとされ、本亜種よりも全体に赤褐色味がある亜種リュウキュウオオコノハズクは琉球諸島の一部に生息する。平地や山地の豊かな森に棲み、社寺林や竹藪、針葉樹の密生林内などで確認されることが多い。冬季は暖地に移動することがあり、民家の周辺で観察されることもある。コノハズクよりも局地的で定着性が強いと言われていたが、夜行性であることや、鳴き声があまり目立たないことなどから生息確認が難しい種である。鳴き声

参考文献

星野由美子 (2023) 元ふれあいの里奥出雲公園における鳥類-2022年度の調査記録-、島根県立三瓶自然館研究報告、21: 51-56。
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥、719pp. 山と溪谷社、東京。
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を捕ろう 2016-2021年、175pp. 日本繁殖分布調査会、東京。

は「ポーウ ポーウ…」という竹筒を吹くようなかなり低い声で鳴く。この声で1分以上鳴き続けることがある。「キュリー」という声も出す。このほかメスは「ミャー」というネコのような鳴き声を発することもある。夕方から活動し、小鳥類や小型哺乳類、両生類、昆虫類などを捕食する。飛翔の際には、消音機能がついた翼で、羽音もなく静かに飛ぶ。繁殖期は5-7月で、森林内の樹洞やキツツキの古巣、民家の屋根裏や軒下などを利用して営巣する。1回の繁殖で4-5個の卵を産む。抱卵はメスのみで行い、オスがメスにエサを運びとされる。

県内での生息地域・生息環境

県内には本亜種が留鳥として生息する。隠岐諸島や中国山地などの豊かな森に生息し、まれに確認される。過去には、島根半島(北山山系)で繁殖が確認されたことがある。近年では繁殖は確認されていないが、ほぼ毎年のように5-8月に雲南市内の森林で確認されている事例がある。

存続を脅かす原因

森林の開発、営巣木となる大木のある森林の減少など。生息に気がつかないうちに、生息地を消失あるいは狭めている可能性がある。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ブッポウソウ目カワセミ科

アカショウビン

Halcyon coromanda major (Temminck & Schlegel, 1848)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種(亜種)は、夏鳥として渡来するが、繁殖に利用する古木や赤土の崖面などが減少していると考えられ、繁殖環境の悪化が危惧される。

概要

本亜種はカワセミ科ヤマショウビン属の全長約27cmの鳥。嘴は鮮やかな赤色で太くて長い。頭部から胸は橙褐色、背から腰にかけては赤褐色で、腰に水色の部分がある。喉は白っぽく、腹から下尾筒にかけては淡い橙褐色で脚も赤い。南西諸島に生息する亜種リュウキュウアカショウビンは、上面が光沢のある青紫色で腰の水色も鮮やかで大きい。種としては東南アジア諸国や、フィリピン、シンガポール、マレーシア、インドネシアなどに分布し、国内には夏鳥として渡来する。冬期にはスダラ列島周辺へ渡るとされているが、繁殖期に県内で生息していた個体が、冬期にフィリピンのルソン島付近で越冬した記録もある。国内には北海道から九州まで飛来し、山地の渓流がある、よく茂った落葉広葉樹林に生息する。「キョロロロー」と聞こえるよく響く声で鳴き、その特徴のある鳴き声から存在を知ることが多い。早朝によく鳴くほか、雨天や曇りの日には日中でもよく鳴く。食性は動物食で、カエルやサワガニ、昆虫類、魚類など森林内の水辺に棲む小動物を好んで食べる。繁殖期は6-7月で、巣

参考文献

星野由美子・市橋直規 (2019) アカショウビン 12年間放鳥の記録～島根県ふれあいの里奥出雲公園における標識調査より～、2019年度(第34回)日本鳥類標識協会全国大会講演要旨集: 18。
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥、719pp. 山と溪谷社、東京。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生息図鑑<陸鳥編>、301pp. 保育社、大阪。
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を捕ろう 2016-2021年、175pp. 日本繁殖分布調査会、東京。

は森林の樹洞や朽木、垂直に切り立った粘土質の崖などに穴を掘る。まれにキイロスズメバチの古巣や、民家の土壁に営巣することもある。1回の繁殖で5-6個の卵を産み、雌雄が交代で抱卵し、21日ぐらいで雛がふ化する。その後、17日程度で巣立つ。全国繁殖分布調査では、1970年代以降、全国の分布は拡大傾向にあるが、北海道だけは減少傾向にある。1990年代と2010年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の全国の記録では、171地点から312地点へと増加していた。

県内での生息地域・生息環境

中国山地や隠岐諸島などの森林に夏鳥として渡来し、渓流沿いの林内を中心に生息する。サワガニなどが多く生息したり、大径木が多く残ったりしているような豊かな自然環境の残存する地域に多い。

存続を脅かす原因

営巣に利用する大木や赤土の崖の減少。森林の伐採や開発などにより、営巣地や採食地が失われることはもとより、その周辺の植生などが変化することも影響する可能性がある。カメラマンなどによる過剰な接近や繁殖地への立ち入りといった人為的な影響。越冬地や中継地の開発等による環境の変化。

(執筆: 星野 由美子)

準絶滅危惧 (NT)

カモ目カモ科

マガン

Anser albifrons albifrons (Scopoli, 1769)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



鳥類

選定理由

宍道湖・中海周辺は福井平野から西では唯一の集団越冬地として貴重。国内では限られた越冬地に集中する分布の局在の解消が課題とされる。

概要

シベリアなどの極北地で繁殖し、国内には冬鳥として渡来。かつてはほぼ全国に渡来したが、狩猟圧や越冬地の環境悪化などにより減少。国の天然記念物に指定され保護されるようになり、渡来数は回復して増加してきたが生息地は増えていない。2023年度のガンカモ類の生息調査では約24万羽で約9割が宮城県。

県内での生息地域・生息環境

宍道湖西岸域では1979年以降渡来数が増加、2000年代後半には4,000羽以上を数えたが、2010年代は前年を下回る年もあり、2020年代は3,000羽前後。塘は宍道湖のほか斐伊川下流から河口部で、ほとんどが西岸域の水田地帯で採食する。能義平野や中海南岸部を採食地とする群れもある。隠岐にも少数が渡来し、県西部や中部でも観察されることがあるが多くは一時的。

存続を脅かす原因

水田地帯が次第に縮小しつつある上に、作付けの変化などで採食に適した冬季に耕作しない水田が減っている。採食や休息時に群れが集中することもあり、鳥インフルエンザなどの感染症が発生した場合に個体群に影響する恐れも考えられる。

(執筆: 森 茂晃・佐藤 仁志)

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター (2025) 第55回ガンカモ類の生息調査報告書, 119pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2025) 島根県内におけるカモ科鳥類のカウント結果報告 (2023年度). ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 1-13.
公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2025) 宍道湖グリーンパーク自然観察リーフレット 秋～冬編②改訂3版 宍道湖に飛来するマガンとコハクチョウ, 米子プリント社, 米子.
牛山克己・天野達也 (2006) マガン, Bird Research News, 3(3): 4-5.

準絶滅危惧 (NT)

カモ目カモ科

コハクチョウ

Cygnus columbianus bewickii Yarrell, 1830

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

宍道湖・中海とその周辺は、毎年群れが渡来する集団越冬地となっているが、主要な採食地になっている水田地帯で採食に適した環境が減り続ければ、越冬状況に影響する可能性も考えられる。

概要

亜種コハクチョウは、シベリアのツンドラ地帯などで繁殖し、国内には冬鳥として渡来する。ガンカモ類の生息調査では、2003年度の45,000羽程度から2011年度にかけて減少傾向が見られたが、2012年度以降は増加傾向に転じ、近年は40,000羽以上で推移。亜種アメリカコハクチョウも少数渡来し、県内でも亜種間交雑の可能性のある個体も含めて1～数羽が観察される。

県内での生息地域・生息環境

宍道湖周辺では2000年代後半にかけて増加傾向で、一時は1,000羽以上の年もあったが、その後は減少傾向で2021年度以降は500羽を下回っている。また、斐伊川中流域にも100羽前後が越冬する。中海周辺では、能義平野などおもに南岸域を採食地として2,000羽前後が見られる。おもな採食地は水田地帯で湿田を好む傾向があるほか、宍道湖では少数が湖内で水草を食べる。隠岐にも少数が渡来するがほとんどが通過と考えられる。

存続を脅かす原因

乾田化や秋耕、作付けの変化などに伴う採食に適した水田の減少。

(執筆: 森 茂晃)

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター (2025) 第55回ガンカモ類の生息調査報告書, 119pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2025) 島根県内におけるカモ科鳥類のカウント結果報告 (2023年度). ホシザキグリーン財団研究報告, 28: 1-13.
公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2025) 宍道湖グリーンパーク自然観察リーフレット 秋～冬編②改訂3版 宍道湖に飛来するマガンとコハクチョウ, 米子プリント社, 米子.
公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2024) 令和5年度米子水鳥公園事業報告書, 117pp. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団, 米子.
渡辺朝一 (2010) コハクチョウ, Bird Research News, 7(3): 4-5.

準絶滅危惧 (NT)

カモ目カモ科

ツクシガモ

Tadorna tadorna (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



鳥類

選定理由

国内では干潟の埋め立てなど生息適地の減少がある一方で、分布が拡大し、個体数は増加傾向にある。県内にも毎年少数が渡来するが、干潟のような広い湿地はなく、越冬個体が存続する基盤は脆弱と考えられる。

概要

全長約60cm。体は白く、頭と肩羽は緑色の光沢がある黒で、背から胸に栗色の帯がある。嘴は赤く、オスは繁殖期に基部がこぶのようになる。ユーラシア大陸の温帯部に分布し、国内には冬鳥として渡来する。全国越冬分布調査によると、1980年代は有明海を中心に九州や中国地方で記録されていたが、2010年代は北の方へ分布が拡大している。個体数は、ガンカモ類の生息調査では2009年度以降増加傾向となっている。おもに海岸や河口部の干潟に生息し、軟体動物や昆虫、甲殻類などを食べる。干拓地や水田などで見られることもある。

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター (2025) 第55回ガンカモ類の生息調査報告書資料編, 80pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年, 170pp. バードリサーチ・日本野鳥の会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

宍道湖や中海などに少数が冬鳥として毎年渡来し、高津川河口などでも観察されることがある。おもに泥地がある場所に生息し、水田で見られることもある。

存続を脅かす原因

工事などによる河口部や岸辺の浅い砂泥地の減少のほか、乾田化や作付けの変化などで冬季に湿地状態の水田が減少することも影響する可能性がある。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

カモ目カモ科

オシドリ

Aix galericulata (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

越冬期は群れが見られるが繁殖期の確認は少ない。ドンブリを餌資源とし、樹洞で営巣するなど森林環境にも依存することから、水辺から森林まで地域一帯の自然度の低下に対して脆弱な可能性がある。

概要

全長約45cmの小型のカモ類。ロシア極東南部から中国、日本にかけて分布。国内では、北海道で夏鳥、本州は北部で留鳥または夏鳥、中・南西部で留鳥または冬鳥、九州や四国、琉球諸島では一部で留鳥。周囲を森林で囲まれた河川や池などを好み、木の枝にもよくとまる。雑食性だが、水辺や陸上でシイ・カシ類などのドンブリを好んで食べる。樹洞で繁殖し、巣箱を利用することもある。

参考文献

藤巻裕蔵 (2013) オシドリ, Bird Research News, 10(10): 4-5.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
森茂晃 (2023) センサーカメラで撮影されたオシドリの採食行動パターン, バードリサーチ鳥類学大会2023講演要旨集: 13.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪.

県内での生息地域・生息環境

丘陵から山間部にかけて河川や池などに生息し、冬季には斐伊川や神戸川、江の川、高津川などの中流から上流などで群れが見られる。冬季の主要な餌資源はドンブリと考えられ、朝と夕方に水辺から離れたシイ・カシ類がある林まで飛来して採食する行動も観察されている。夏季の観察例は少なく、冬季に渡来する個体が多いと考えられる。繁殖の確認は特に少ないが、本土側だけでなく隠岐諸島でも繁殖している。

存続を脅かす原因

繁殖に適した樹洞のある林の減少。主要な餌資源になるシイ・カシ類の減少など。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

チドリ目セイタカシギ科

セイタカシギ

Himantopus himantopus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



選定理由

県内には毎年少数が旅鳥として渡来するが、採食などの利用に適した環境は少なくなっていると考えられる。

概要

全長約37cm。細い嘴と、長くて赤い脚が特徴。背面は黒く、オスの繁殖羽は緑色の光沢がある。下面は白く、頭部から後頸には性や個体によってさまざまなパターンの黒色模様がある。浅い水辺で昆虫や甲殻類、小魚などを採食する。国内では、愛知県、千葉県、東京都、大阪府など局地的に繁殖が確認されているほか、渡りの時期には全国で記録があり、越冬地の記録は増えている。一方で、全国でシギ・チドリ類が利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、本種も渡り途中や越冬地でのエネルギー補給に影響が出ていると考えられている。

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京。
公益財団法人ホシザキグリーン財団 (2017) グリーンパークでBird Watching ~20年の記録~, 124pp. 公益財団法人ホシザキグリーン財団, 出雲。
松井淳・守屋年史・三木敏史 (2022) セイタカシギ, Bird Research News, 6(3): 1-2。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪。
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年, 170pp. バードリサーチ・日本野鳥の会, 東京。

県内での生息地域・生息環境

旅鳥として水田や河口部の浅場などの湿地に少数が渡来する。宍道湖や中海の周辺では毎年1羽あるいは数羽くらいの群れが複数見られる。時に10羽以上の群れが見られることがあり、2003年4月には宍道湖西岸で25羽が観察されたことがある。

存続を脅かす原因

河口部などにある砂泥地の浅場は限られ、本種の利用に適した場所は少ない。湿地の休耕地も少なく、春や秋の渡りの時期に利用に適した状態の水田も少なくなっていると考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

チドリ目チドリ科

イカルチドリ

Charadrius placidus Gray & Gray, 1863

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

本種は、以前は河川の中流域などで比較的普通に見られたが、近年その姿を見る機会が少なくなっている。生息に適した環境は不安定で、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

概要

全長20cmほどでコチドリより大きく、嘴もやや長い。国内では本州、四国、九州などでは留鳥だが一部は渡る。北海道では夏鳥として渡来する。おもに川原が発達した河川にすみ、とくに大きい川の中流域の氾濫原や扇状地などの砂礫地に多い。営巣には植生がほとんどない砂礫地を好み、礫の間の地上に窪みをつくり巣にする。1巣卵数はほとんどが4個。ヒナは早成性の離巢性であり、初めは親鳥の抱雛を受ける。

参考文献

清棟幸保 (1978) 増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ, 654pp. 講談社, 東京。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪。
鷹司信輔・池田真次郎 (1936) 日本海沿岸の島々の鳥, 鳥, 9(42): 127-141。
内田博 (2007) イカルチドリ, Bird Research News, 4(6): 2-3。

県内での生息地域・生息環境

おもに大きな河川の中流域に生息し、川原などの砂礫地で少数が繁殖している。一年を通して見られるため、種としては留鳥だが、渡りの時期には平野部の水田などでも観察されることがある。隠岐諸島では古い文献に記載があるが、近年の記録は見当たらない。

存続を脅かす原因

河川改修などによる川原や中州の減少のほか、流量や流路が制限されることで砂礫地の草地化が進むことなど。また、近年は極端な降水の過不足が続くことによる繁殖地の水没や、逆に草地化が進行する可能性があることも懸念される。

(執筆: 森 茂晃・佐藤 仁志)

準絶滅危惧 (NT)

チドリ目チドリ科

シロチドリ

Charadrius alexandrinus nihonensis Deignan, 1941

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



鳥類

選定理由

国内では減少が著しいとされ、県内でも繁殖するがその数は多くない。おもな繁殖地は海岸の砂浜だが、狭小化あるいは人為的な影響を受けやすい場所があるなど不安定な状況も見られ、さらに数が減少する恐れがある。

概要

全長約17cm。種としては世界的に広く分布し、国内では本亜種が北海道から南西諸島まで周年観察されるが、北海道ではおもに夏鳥とされる。海岸の砂浜や河口の干潟、大規模河川の中州、造成地などの砂礫地で繁殖する。餌はおもに動物質で、ゴカイなどの多毛類や甲殻類、昆虫類などを食べる。

●参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
森茂晃・星野由美子・豊田暁 (2012) 島根県において繁殖するシロチドリのつがい数の推定について. 日本鳥学会2012年度大会 講演要旨集, 125.
守屋年史 (2014) シロチドリ. Bird Research News, 11(1): 2-3.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.

県内での生息地域・生息環境

留鳥として砂浜海岸や河口部の砂礫地などに生息する。繁殖はほとんどが砂浜やそれに隣接する造成地で、ある程度の広さを必要とする。2011-2012年に県内29カ所の砂浜で実施した調査では、繁殖の可能性があるつがいは長さ500m未満の砂浜では確認できなかったという結果がある。その後も調査を継続している出雲市の砂浜(約13km)では、現時点で顕著な減少はないものの、砂浜の狭小化や人の活動による影響で営巣場所や数に変化があることを確認している。

存続を脅かす原因

砂浜の侵食、営巣地への人の立ち入りや開発などによる環境改変など。
(執筆: 森 茂晃・星野 由美子)

準絶滅危惧 (NT)

チドリ目シギ科

ハマシギ

Calidris alpina (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

国内で越冬するシギ・チドリ類の中でもっとも多いが、近年減少傾向にある。県内では、以前は冬季に群れが見られる場所がいくつもあり、数十羽の群れもよく見られたが、近年は少なくなった。また渡りの数も減っていると感じられる。

概要

全長約20cm。下向きにやや曲がった長めの嘴を持つ。干潟や河口部の湿地や水田などに渡来し、ゴカイや小型甲殻類などのほかバイオフィルムも採食する。日本鳥類目録改訂第8版では、北アメリカの北極海沿岸で繁殖する亜種キタアラスカハマシギが通過や越冬、ロシア極東北部で繁殖する亜種ハマシギも一部で記録があるとしつつも亜種ごとの分布は検討が必要とし、各地の渡りや越冬の情報を亜種不明としている。

●参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター (2025) 重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) シギ・チドリ類調査 2004-2022年度とりまとめ報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類, 250pp. ぎょうせい, 東京.
桑江朝比呂 (2012) トウネンもハマシギもバイオフィルムを食す. Bird Research News, 9(3): 2-3.
守屋年史 (2018) 冬のハマシギが減少中. バードリサーチ水鳥通信, 19: 1.
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年, 170pp. バードリサーチ・日本野鳥の会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

渡りの時期や冬季に河口部の砂泥地や水田などに見られる。亜種を区別した記録はほとんどない。以前は数十羽、時にはそれ以上の群れが見られる場所が複数あったが、近年は冬季を中心に場所も数も少なくなっている。

存続を脅かす原因

群れが越冬する河口部などの砂泥地は限られ、人為的な改変や人の立ち入りなどが影響する可能性がある。また、渡りの時期や越冬期に、利用に適した湿地状態が保たれた水田や休耕地は少なくなっていると考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

チドリ目カモメ科

ズグロカモメ

Saundersilarus saundersi (Swinhoe, 1871)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



鳥類

■ 選定理由

世界的にも局地的な分布で個体数も限られている。県内では冬季に少数が渡来するが、生息に適した環境は限られている。

■ 概要

全長約32cmでユリカモメより小さい。雌雄同色で、成鳥夏羽では頭部が黒くて眼の周りが白い。冬羽では頭部が白く、眼の後方に黒い斑がある。嘴は太短くて黒く、ユリカモメの赤く細長い嘴と異なる。中国の渤海と黄海沿岸部に繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国南東部、ベトナムで越冬する。国内では九州を中心に、沖縄県や四国、本州中部あたりまで分布し、東北や北海道などにも記録がある。1990年代に当時の分布の中心だった九州で個体数が増加し、その後分布が拡大、2016—

● 参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい、東京。
武下雅文・佐本一雄・林修 (1993) 福岡県曾根干潟におけるズグロカモメの越冬数の年変化と季節変化。Strix, 12: 107-114。
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年。170pp。バードリサーチ・日本野鳥の会、東京。

2022年の全国越冬分布調査では記録メッシュ数が増加している。おもに干潟に生息し、甲殻類やゴカイなどを採食する。

■ 県内での生息地域・生息環境

冬鳥として渡来し、宍道湖や中海ではおもに砂泥地がある河口部や湖岸沿いで1~数羽が観察され、隣接する水田にも飛行する。沿岸の河口部などでも見られることがある。

■ 存続を脅かす原因

県内ではもともと生息適地が少ないため、工事や人の立ち入りなどによって砂泥地や浅場などが減少したり利用が制限されたりすることによる影響は大きいと考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

ペリカン目サギ科

サンカノゴイ

Botaurus stellaris stellaris (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠA類 (CR)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

■ 選定理由

県内には生息に適した広いヨシ原が少なく、存続基盤は脆弱と考えられる上に、生息状況の把握が難しく、気づかないうちに絶滅に瀕してしまう可能性がある。

■ 概要

全長約70cmで、全体に淡黄褐色と暗褐色のまだら模様をしている。国内に分布する亜種は旧北区の広い範囲で繁殖し、ユーラシア大陸北部で繁殖する個体はアフリカ、南アジア、東南アジアに渡り越冬する。国内では、北海道で夏鳥とされ、本州以南の繁殖地は局地的。非繁殖期は国内各地で記録があるが、個体数は多くないとされる。おもに平地の河川や湖沼のヨシ原など、広い湿性草原に生息する。開けた場所にはほとんど姿を現さないため観察されにくい。水辺で魚類や両生類、昆虫類、

● 参考文献

平野敬明 (2018) 渡良瀬遊水地における繁殖期のサンカノゴイ雄の減少。Bird Research, 14: A13-A22。
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい、東京。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>。304pp。保育社、大阪。
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年。170pp。バードリサーチ・日本野鳥の会、東京。

甲殻類などを採食する。全国越冬分布調査の記録メッシュ数は1984—1986年より2016—2022年が増えているが、個体数が減っている生息地もあり、生息知見の蓄積で分布拡大のように見えている可能性もあるとされる。

■ 県内での生息地域・生息環境

冬鳥として、おもに平野部の河川や湖の広いヨシ原に生息するが、潜んでいることが多く、姿を見る機会は少ない。

■ 存続を脅かす原因

河川管理の工事などの人為的な改変や植生の遷移などによる生息に適した湿地環境の減少。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

ペリカン目サギ科

クロサギ

Egretta sacra sacra (Gmelin, 1789)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



鳥類

選定理由

県内における個体数は多くないと考えられ、繁殖に適した場所は少ない。従って、存続基盤は脆弱と考えられ、容易に減少する恐れがある。

概要

全長約62cmで、全身が黒い(本種には白色型があり、南西諸島以南では白色型が多くなるとされている)。種としては、東南アジアからオーストラリアに広く分布する。国内では本亜種が本州以南に留鳥として特に岩礁の多い海岸に生息し、局地的に繁殖する。魚類や甲殻類などを採食する。繁殖期には小集団あるいはつがいごとに分散して、海岸などにある低い木の上や岩棚、岩の隙間などに巣をつくる。

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター(2011)平成22年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)海鳥調査業務報告書, 136pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田。
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>, 304pp. 保育社, 大阪。
阪本周一(1991)岩場を渡り歩くクロサギ, 日本生物, 5(5): 36-37。
内田映(1980)島根県のクロサギ, しまね野鳥, 25: 1-3。

県内での生息地域・生息環境

留鳥として海岸に生息する。冬季は河口部や岩礁、磯浜などで姿が見られるが1羽でいることが多く、一度に複数羽を見ることはあまりない。海岸や島嶼の岩礁がある崖地で繁殖し、岩棚の窪みや深い裂け目を営巣に利用していた例がある。隠岐諸島でも繁殖が確認されている。県内で営巣あるいはその可能性が高いと考えられる行動が観察されたことがある地点は少なく、適地は限られると推測される。

存続を脅かす原因

海岸部の開発や利用などによる生息に適した環境の減少。営巣地やその周辺への人(磯釣りなど)の立ち入りなどの影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

タカ目タカ科

ハイロチュウヒ

Circus cyaneus (Linnaeus, 1766)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

チュウヒ同様、ヨシ原などからなる生態系における食物連鎖の頂点に位置し、その豊かさを象徴する種の一つ。渡来数は多くなく、生息に適した広いヨシ原は限られるため、環境が悪化した場合の影響は大きいと考えられる。

概要

オスは全長約45cm、メスは約50cm。オス成鳥は上面と顔から胸までが灰色で、翼の先端が黒い。メスは上面が褐色で風切と尾羽に横帯があり、上尾筒は白い。国内には冬鳥として渡来する。平野部の草原やヨシ原などのほか、山地の草原などにもたびたび出現する。草原や農耕地の上をゆっくりしたはばたきと翼をV字型に保った滑翔をしながら獲物を探し、ネズミや小鳥類、カエルなどの小動物を捕食する。

参考文献

平野敏明・遠藤孝一・野中純・川田裕美・内田裕之・堀江玲子・長野大輔・船津丸弘樹・植田陸之(2010)渡良瀬遊水地におけるチュウヒとハイロチュウヒの越冬個体数の長期モニタリング, Bird Research, 6: A29-A42。
森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男(1995)日本のワシタカ類, 631pp. 文一総合出版, 東京。
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪。
多田英行(2015)岡山県における越冬期のチュウヒとハイロチュウヒの渡来時期と個体数の季節変動, Bird Research, 11: A11-A20。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥としておもに河川や湖沼のヨシ原などの広い草原に生息し、農耕地にも飛行して狩りをする。河川敷に広いヨシ原がある斐伊川とその河口部がある宍道湖西岸域では冬季に複数個体がみられる。隠岐諸島でも記録がある。

存続を脅かす原因

工事などによる広いヨシ原の縮小や消失。生息に適した草原環境からの植生遷移。採餌や壻など高頻度利用する場所で、過度な接近や長時間にわたる撮影などがあった場合の影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

フクロウ目フクロウ科

アオバズク

Ninox japonica japonica (Temminck & Schlegel, 1845)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館



選定理由

夜行性であることから正確な生息状況は把握できていないが、繁殖のための樹洞のある木が減少することで、減少傾向が進行する恐れがある。

概要

全長約29cm。頭部から上面は黒褐色で、下面には白地に黒褐色の太い縦斑がある。国内には、亜種アオバズクが夏鳥として渡来し、南西諸島には亜種リュウキュウアオバズクが留鳥として分布する。本亜種は、平地から山地の林に生息し、営巣が可能な大きな木がある社寺林や校庭の大木などでも見られ、樹洞で営巣する。夜行性で、主として昆虫を採食するが、小鳥やコウモリなども捕る。夜間に「ホッホウ ホッホウ…」

参考文献

叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
植田睦之 (2018) 減ってしまったアオバズク. 私たちの自然 2018年11/12月号
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

と鳴く。全国鳥類繁殖分布調査によると1970年代から1990年代にかけて記録メッシュ数が減少したが、1990年代から2010年代にかけては、メッシュ数、現地調査の確認地点数ともに増加傾向にある。

県内での生息地域・生息環境

夏鳥として渡来し、平野部から山地に広く分布する。営巣が可能な木があれば社寺林や校庭にある大木などでも見られる。

存続を脅かす原因

森林の伐採や開発によって生息地が減少しているほか、営巣が可能な樹洞がある大木の減少など。

(執筆者: 星野 由美子・森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

フクロウ目フクロウ科

トラフズク

Asio otus otus (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団



選定理由

県内の記録は少なく地域が限られている。夜行性ということもあり生息状況は十分に把握できていないが、渡来数は少ないと考えられる。

概要

全長約38cmで、ほぼ同サイズのコミミズクとは橙色の虹彩や羽角がより長いといった違いがある。種としては全北区に分布し、国内では本亜種が本州中部以北で局地的に繁殖し、以南ではおもに冬鳥。平地から山地の森林に生息し、ヨシ原や農耕地でも見られる。夜間に活動しておもにネズミ類を餌とするほか、就寝中の鳥類を捕食することもある。繁殖地ではタカ類やカラス類の古巣や樹洞に産卵する。

参考文献

日高敏隆監修 (1997) 日本動物大百科 第4巻 鳥類 II, 180pp. 平凡社, 東京.
平野敏明 (2012) 渡良瀬遊水地とその近隣農耕地におけるトラフズクの食性. 日本鳥学会誌, 61(1): 130-136.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.

県内での生息地域・生息環境

近年は県東部などでおもに冬季に観察情報があり、冬鳥としてヨシ原や河畔林、農耕地などの環境がある地域に渡来していると考えられるが、生息状況の把握はできていない。1994年7月に県中部で拾得された卵と雛が、サイズや形態から本種(亜種)の可能性があるとされたが確定には至っておらず、その後も確実な繁殖確認はなく実態は不明である。

存続を脅かす原因

生息地である林や草原の減少。本種の生息に気づかずに伐採などで林やヨシ原などを狭めてしまう可能性がある。日中の休息地では過度な接近や長時間にわたる撮影などの影響も懸念される。

(執筆者: 森 茂晃・佐藤 仁志)

準絶滅危惧 (NT)

フクロウ目フクロウ科

コミミズク

Asio flammeus flammeus (Pontoppidan, 1763)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



鳥類

■ 選定理由

日中に観察される姿だけでは生息状況を十分に把握できないと考えられるが、渡来数は少ないと思われる。県内の記録は河畔林やヨシ原あるいはその周辺の農耕地がほとんどだが、こうした生息環境がある地域は限られており、悪化した場合の影響は大きいと考えられる。

■ 概要

全長39cmほどのフクロウの仲間、羽角はごく短く虹彩は黄色。種としては広い繁殖分布域を持ち、オーストラリア大陸を除く世界各地に分布する。国内には本亜種がおもに冬鳥として渡来し、河口部や河川沿いの広い草原などに生息する。夜行性だが、比較的明るい時間帯にも活動することがあるとされる。河川敷や農耕地で杭の上に止まって待ち伏せしたり低く飛んだりしながら、ネズミや小鳥、昆虫などを捕食する。

● 参考文献

日高敏隆監修(1997)日本動物大百科 第4巻 鳥類Ⅱ, 180pp. 平凡社, 東京.
中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.

■ 県内での生息地域・生息環境

冬鳥として宍道湖や中海の周辺など平野部の河川敷の草原や河畔林、農耕地などがある環境に渡来していると考えられるが、生息数などの状況は把握できていない。

■ 存続を脅かす原因

生息地である林や草原の減少。特に本種が生息していると気づかずに、広いヨシ原や河畔林を狭めてしまう可能性がある。また、日中の休息地や活動個体に対して過度な接近や長時間にわたる撮影や観察などの影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

フクロウ目フクロウ科

フクロウ

Strix uralensis Pallas, 1771

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):北脇努

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

■ 選定理由

夜行性であることから正確な生息状況は把握できていないが、繁殖に利用する樹洞がある森林は減少傾向にあると考えられる。

■ 概要

全長約50cm。頭部から上面は淡褐色で下面には白地に褐色の縦斑がある。羽角はなく、眼は黒い。国内では4亜種に分類されているが亜種ごとの分布域は明確ではない。留鳥として九州以北の平地から山地の林に生息する。日中は暗い林の中で休息し、夕暮れから活動し始めることが多いが、日中に活動することもある。おもにネズミなどの小型哺乳類や小鳥類を捕食する。夜間に「ゴウホウ ゴロツケ ゴウホウ」と鳴く。おもに大木などにできた樹洞に営巣する。全国繁殖分布調査では1990年代と2010年代の調査記録の比較において、確認地点が増加していたことから分布は拡大傾向にあるとされている。

● 参考文献

叶内拓也(2024)山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

■ 県内での生息地域・生息環境

鳴き声は、山地のほか丘陵の林など各地で聞かれるが、繁殖には営巣可能な樹洞や十分な餌資源が必要であり、生息の実態を反映しているかは不明。冬季は平野部の河畔林などでも見ることがある。

■ 存続を脅かす原因

森林の伐採や開発による生息地の減少。特に営巣可能な樹洞がある森林の減少のほか、耕作放棄地の増加などによる採食地や餌資源の減少も考えられる。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

ハヤブサ目ハヤブサ科

チョウゲンボウ

Falco tinnunculus interstinctus McClelland, 1840

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

かつて越冬期間中よく見られていた場所で観察する機会が減っているなど、渡来数が減少している可能性があり、生息状況の変化など実態の把握が望まれる。

概要

オスは全長約33cm、メスは約39cm。キジバトほどの大きさのハヤブサの仲間。オスは頭頂から顔が青灰色、背中が茶褐色で黒い斑点がある。メスは上面が褐色で黒い斑点があり、下面は淡黄褐色で黒い縦斑がある。種としては、アフリカ大陸からユーラシア大陸に分布する。国内では本亜種が近畿地方から北海道にかけて繁殖し、越冬期は全国的に分布する。平地から山地の草原、農耕地、河川敷などに生息する。ハタネ

参考文献

星野由美子 (2016) 2000年から2016年に三瓶山北麓で観察された鳥類。島根県立三瓶自然館研究報告, 14: 47-55.
 本村健 (2012) チョウゲンボウ。Bird Research News, 9(8): 4-5.
 中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp. 保育社, 大阪。
 長廻哲雄 (2023) コムドリとチョウゲンボウ。スペキュラム, 216: 5。
 日本野鳥の会島根県支部 (1999) フィールドノート。スペキュラム, 71: 11。

ズミ類の採餌に適応した種とされ、停空飛翔や止まり木で待ち伏せして探し、見つけると降下して捕らえる。ほかに小鳥や昆虫、爬虫類なども捕食する。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として、おもに平野部の農耕地や河川敷の草原などで見られる。例数は少ないが、夏季の観察情報もあり、山地の観察例もある。電柱や建物の屋上の角などに止まっている姿のほか、羽ばたきと短い滑空を繰り返して直線的に飛び姿を見かけることが多い。

存続を脅かす原因

農耕地や河川敷の草原など生息が確認されている環境の減少。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

ハヤブサ目ハヤブサ科

コチョウゲンボウ

Falco columbarius insignis (Clark, 1907)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

県内には冬鳥として渡来するが、個体数は少なく、生息に適した環境は次第に減少していると考えられる。

概要

全長はオス約29cm、メス約33cmで、キジバトくらいの大きさの小型のハヤブサのなかま。チョウゲンボウより一回り小さく、尾羽が短い。オス成鳥は体と翼の上面が青灰色、メス成鳥や幼鳥の上面は灰褐色で、チョウゲンボウの茶褐色と異なる。種としては、全北区分布型。国内には、本亜種が冬鳥として渡来し、広い農耕地、干拓地、河川の草原など開けた場所に見られる。杭や電線などに止まって獲物を探し、見つけると飛び立って急襲する。おもに小鳥類を捕食するが、ネズミ類や昆虫な

参考文献

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1995) 図鑑日本のワシタカ類。631pp. 文一総合出版, 東京。
 中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp. 保育社, 大阪。
 植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年。170pp. パードリサーチ・日本野鳥の会, 東京。

ども捕る。全国越冬分布調査では、1980年代は局所的に見られる種だったが、2010年代には記録メッシュ数が大幅に増加し、広く見られる種となったとされる。

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として、おもに農耕地や河川敷など開けた環境に生息するが、観察される機会などの状況から個体数は少ないと考えられる。隠岐諸島にも記録や観察情報がある。

存続を脅かす原因

広い農耕地や河川敷の草原など現状生息が見られている環境の減少。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ツバメ科

コシアカツバメ

Cecropis daurica japonica (Temminck & Schlegel, 1845)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



鳥類

選定理由

本種(亜種)は、夏鳥として県内に渡来するが、近年では繁殖の確認地点が減少傾向にあり、その動向を注意深く見守っていく必要がある。

概要

全長約19cm。ツバメよりもやや大きく、雌雄同色。頭から背は光沢のある紺色。腰の赤味があるオレンジ色が名前の由来となっている。眼の後ろから頸の後ろも赤茶色で、喉から腹まではクリーム色にやや赤味が感じられることもあり、黒褐色の縦斑がある。国内には、夏鳥として渡来し、海岸から市街地の開けたところや農耕地、丘陵地などに生息する。全国鳥類繁殖分布調査によると、1990年代と2010年代で、全国的にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録では、コシアカツバメが記録できた地点は、70地点から46地点へ、記録個体数は318から216に減少した。

参考文献

叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新 日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

県内に広く分布し、学校や庁舎などの大きなコンクリート製の建物に営巣していることが多い。全国鳥類繁殖分布調査によると確認地点は減少傾向にある。

存続を脅かす原因

建造物の営巣に対する人為的な攪乱のほか、越冬地での環境改変など。またスズメによる巣の乗っ取りやカラスによる巣の破壊行動なども見られる。

(執筆: 星野 由美子)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ヨシキリ科

オオヨシキリ

Acrocephalus orientalis (Temminck & Schlegel, 1847)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

本種は繁殖期に特徴のある声でさえずるが、宍道湖周辺では近年その数が少なくなったと感じられる。1994年の斐伊川河口部の調査と同じ範囲を2024年に調査したところ、確認された個体数が約9割減少という結果があり、ほかの地域の生息状況も早急に把握することが望まれる。

概要

全長約18cmで雌雄同色。上面はオリーブ褐色で、眉斑と下面はバフ白色。国内には、おもに夏鳥として河口域や河川、湖沼のヨシ原に生息する。繁殖期は、オスが濁った声で「ギョギョシ ギョギョシ」などと大きな声でさえずり、渡来当初は夜間も含めてほぼ一日中さえずる。ヨシなどの茎にカップ状の巣をつくり、3-5卵を産む。抱卵は約13日、巢内育雛は約14日間。

参考文献

建設省中国地方建設局出雲工事事務所(1997) 斐伊川水系の鳥類, 171pp. 社団法人中国建設共済会, 広島.
中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.
西海功(2007) オオヨシキリ, Bird Research News, 4(8): 4-5.
日本鳥学会(2024) 日本鳥類目録改訂第8版, 506pp. 日本鳥学会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

県内各地のおもに平地のヨシ原などに夏鳥として渡来し、隠岐も繁殖が確認されている。2024年に斐伊川河口部からさらに1km余り上流まで河川敷を調査した結果では、ヨシ原だけの場所には少なく、ヤナギ類などが混在する河畔林になっている場所でさえずる個体が多い傾向が見られた。

存続を脅かす原因

繁殖地となるヨシ原などの減少。繁殖期に極端な降水で増水し、河川敷のヨシ原が浸水することによる影響も懸念される。

(執筆: 森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ヒタキ科

コルリ

Larivora cyane nechaevi (Red'kin, 2006)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):石本賢治



鳥類

■ 選定理由

県内でも繁殖期に継続して観察されており、繁殖していると考えられる。生息(繁殖)地が限られ、存続基盤が脆弱なうえ、本種(亜種)の営巣環境はシカ類による影響を受けやすいと考えられ、今後の動向を注意深く見守っていく必要がある。

■ 概要

全長約14cm。スズメよりわずかに小さい。オスは頭から上面が暗青色で下面は白い。メスの上面はオリーブ褐色で腹は白っぽい。国内では主として本州中部以北で繁殖し、西日本での繁殖数は少ない。広島県や鳥取県では繁殖が確認されており、岡山県、山口県でも夏季にさえずりが確認される。林床や地上近くで昆虫などを採食し、藪の中にいること

● 参考文献

叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
 植田睦之・岩本富雄・中村 豊・川崎慎二・今野 怜・佐藤重穂・高 美喜男・高嶋敦史・滝沢和彦・沼野正博・原田 修・平野敬明・堀田昌伸・三上かつら・柳田和美・松井理生・荒木田義隆・才木道雄・雪本晋資(2014) 全国規模の森林モニタリングが示す5年間の鳥類の変化. Bird Research 10: F3-F11.
 植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

が多く、姿を見る機会は少ない。シカ類の採食によって林床の植生が減少した場所では個体数が減ることが知られており、シカ類の影響による生息適地の減少が懸念されている。

■ 県内での生息地域・生息環境

渡りの時期には低山の林などでも観察され、特に春は特徴的なさえずりから情報が多。一方で、夏季におもに中国山地の標高1,000m前後のササ葎のあるブナ林などで複数のさえずりが継続して確認されており、繁殖しているものと考えられる。

■ 存続を脅かす原因

繁殖に適した森林環境の改変など。ニホンジカによる林床の攪乱。
 (執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ホオジロ科

ホオアカ

Emberiza fucata fucata Pallas, 1776

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):島根県立三瓶自然館



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

■ 選定理由

本種(亜種)は本州中部以北がおもな繁殖地だが、県内でも繁殖している。ただし、繁殖地は局在しており、生息環境の悪化によっては急激に減少するおそれがある。

■ 概要

全長約16cmでスズメくらい大きさ。頭部は灰色で黒褐色の細い縦斑がある。頬は茶褐色。背は全体に茶色で黒い縦斑がある。胸に黒と褐色の2本の横帯があるのが特徴。国内では、北海道、本州、四国、九州の各地で夏鳥として繁殖し、冬は本州の西南部以南で越冬する。平地から山地の草原に生息し、なかでも比較的草丈の低い乾いたところを好む。全国繁殖分布調査によると、1970年代から1990年代にかけて減少したが、2010年代にかけてはやや回復した。特に分布の中心域である東北から北海道の地域での回復が顕著。

● 参考文献

叶内拓也(2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
 中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.
 植田睦之・植村慎吾(2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

■ 県内での生息地域・生息環境

県内では河川敷の草原や農耕地などで少数が越冬する。また、1988年の浜田市の繁殖例をはじめ、県西部や東部の河川の河口部あるいは周辺の草原で繁殖が確認されており、近年でも繁殖期にさえずりの姿が観察されている。

■ 存続を脅かす原因

草原の開発や河川の増水などによる河川敷の草地の攪乱、遷移による生息に適した草原の減少など。
 (執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ホオジロ科

ミヤマホオジロ

Emberiza elegans Temminck, 1836

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

本種(亜種)は、県内では隠岐や中部、東部で繁殖が確認されているが、その地域は限られていることから、繁殖個体群が存続する基盤は脆弱と考えられる。

概要

全長約16cm。オスは頭頂、顔、胸は黒く、眉斑と喉は黄色。上面は茶褐色で肩と腰は灰色。メスは頭頂、顔、胸が褐色で眉斑と喉は淡黄色。国内では本県のほかに対馬と広島県北部で繁殖が確認されたほか、鳥取県でも繁殖期の観察記録がある。以前は対馬でしか繁殖記録がなかったため、分布が拡大していると考えられる。広い草地や農耕地の中央部に出ることはほとんどなく、藪の下や灌木林、林縁近くの地上で採食する。営巣は、藪の中や地上でするとされる。

参考文献

秦智秋(2020)フィールドノート、スペキュラム、195:8。日本野鳥の会島根県支部
 星野由美子・市橋直規(2023)三瓶山におけるミヤマホオジロ*Emberiza elegans*の繁殖について。島根県立三瓶自然館研究報告、21:1-9
 市橋直規・深谷治・森茂晃・江崎逸郎・岡田美耶(2016)隠岐諸島におけるミヤマホオジロ*Emberiza elegans*の繁殖。ホシザキグリーン財団研究報告書、19:195-199
 叶内拓也(2024)山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥、719pp。山と溪谷社、東京。
 中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp。保育社、大阪。

県内での生息地域・生息環境

隠岐島前および三瓶山で繁殖が確認されているほか、島根半島でも幼鳥が観察されるなど局所的に繁殖している。三瓶山では10年以上にわたって複数の地点で繁殖していることが確認されており、繁殖は定着していると考えられる。

存続を脅かす原因

繁殖に適した森林環境の人為的な改変。ニホンジカの増加による林床の攪乱と植生の変化など。

(執筆: 星野 由美子)

準絶滅危惧 (NT)

スズメ目ホオジロ科

クロジ

Emberiza variabilis Temminck, 1836

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

本種は、県内の中国山地で継続して繁殖期に観察されており、繁殖している可能性が高いと考えられるが、生息(繁殖)地が限られているため存続基盤は脆弱である。

概要

全長約17cm。スズメよりやや大きい。オスは全体が灰黒色で上面には黒色の縦斑がある。メスは全体に薄茶から茶褐色で上面にある縦斑は濃茶褐色。黄白色の頭中央線と眉斑がある。開けた場所に現れることは少なく、ササ藪の下などの地上で採食する。繁殖分布はカムチャッカ半島、サハリン、日本で、ユーラシア大陸東部のごく限られた地域。国内では、おもに本州中部以北で繁殖するが、広島県や鳥取県では繁殖が確認されている。全国的には、近年では繁殖期の確認地点が増加傾向である。

参考文献

叶内拓也(2024)山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥、719pp。山と溪谷社、東京。
 中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp。保育社、大阪。
 鳥取県(2022)レッドデータブックとっとり改訂版。鳥取県生活環境部自然共生課。(https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1308351/2birds037-068.pdf、(2025年9月30日閲覧))
 植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会、東京。

県内での生息地域・生息環境

夏季に、標高1,000m前後のササ藪のあるブナ林や広葉樹林などの複数の場所で、さえざりが確認されており繁殖の可能性は極めて高い。全国鳥類繁殖分布調査によると、島根県内でも確認地点は増加しているが、極めて限定的な場所である。非繁殖期には、平地や低山でも観察される。

存続を脅かす原因

繁殖に適した森林環境の人為的な改変など。ニホンジカの増加による林床の攪乱と植生の変化。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

情報不足 (DD)

カモ目カモ科

コクガン

Branta bernicla nigricans (Lawrence, 1846)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類



選定理由

県内に冬鳥として渡来することがあるが、観察される数は少ない。国内では、おもに藻場のある沿岸や平磯がある岩礁海岸などで採食するが、県内では類似環境の観察情報が少ないなどランクの判断には情報が不足していると考えられる。

概要

全長約60cm。全体に黒く、頸に不規則な白斑があり、下腹部から上・下尾筒は白い。国内では北海道、東北地方に多く渡来する。秋季に北海道東部を中心に8,000羽以上が観察されたこともあるが、越冬地の確認数はその1/3以下であり、韓国や中国まで渡っている可能性がある。

参考文献

藤井薫 (2015) コクガン. Bird Research News, 12(3): 4-5.
藤井薫 (2017) 日本におけるコクガンの個体数と分布 (2014-2017年). Bird Research, 13: A69-A77.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい, 東京.
森岡弘之 (1985) 島根県隠岐諸島におけるコクガンの観察と同種の日本における分布について. 国立科学博物館専報, 18: 209-217.
島根県野生生物研究会 (1983) 島根県自然環境保全地域候補地 中海水鳥渡来水域学術調査報告書. 60pp. 島根県, 松江.

される。ほかのガン類と比較して親海性が高いとされ、おもに海岸の入江や内湾などでアマモや海藻類などを食べる。国の天然記念物。

県内での生息地域・生息環境

おもに宍道湖や中海のほか、島根半島や隠岐諸島の海岸などで観察されることがある。記録は1~数羽がほとんどで、毎年のような定期的な渡来情報はない。中海では1974年に、隠岐諸島では1984年にそれぞれ11羽の文献記載がある。宍道湖や中海では湖岸で観察されることもあるが、マガンなどの群れに混じって水田で採食している場合がある。

存続を脅かす原因

県内では、採食生態にあった環境で観察される情報が少なく不明。(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

カモ目カモ科

トモエガモ

Sibirionetta formosa (Georgi, 1775)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



選定理由

県内では2019年度の冬季以降、局地的に密集した集団で過ごす大量飛来の確認が続いているが、生息地の環境次第で状況が大きく変わる可能性や感染症が発生した場合の影響も懸念される。

概要

全長約40cmの小型のカモで、オスは巴模様に形容される特徴的な顔をしている。極東アジアに分布し、東部シベリアを中心に繁殖、朝鮮半島や中国南西部、日本で越冬する。国内では、以前は日本海側の新潟県や石川県などで概ね数千羽程度の渡来数だったが、近年は諫早湾や印旛沼で10万羽以上とされる群れが現れるなど大幅に増えている。

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい, 東京.
神山和夫 (2022) トモエガモの越冬数が急増している. バードリサーチニュース2022年11月: 1【活動報告】. <https://db3.bird-research.jp/news/202211-no1/>. (2025年6月15日閲覧)
森茂晃・星野由美子・豊田暁・田尻浩伸 (2023) 宍道湖に大量飛来したトモエガモAnas formosaの飛行行動と採食地. 日本鳥学会誌, 72(2): 223-233.
森茂晃・星野由美子・安食一歩・豊田暁 (2023) 宍道湖に大量飛来したトモエガモの飛行行動と採食地-4 シーズン比較. 日本鳥学会2023年度大会講演要旨集: 92.
田尻浩伸 (2007) トモエガモ. Bird Research News, 4(12): 4-5.

県内での生息地域・生息環境

県内では各地で数羽から数十羽あるいは数百羽が観察されることがあり、宍道湖では2020年2月に約2万羽が確認されて以降、毎年数万羽が渡来している。江の川中流部でも2019年12月に数千羽が見られ、2021年度には数万羽が確認されている。採食地は水田などのほか、大量飛来した集団がドングリを主要な餌資源にすることも確認されている。

存続を脅かす原因

大量飛来時は密集した群れで過ごすため、餌資源量や生息地の環境変化の影響を受けやすい可能性があるほか、鳥インフルエンザなどの感染症発生時には個体群に影響する恐れがある。(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

アマツバメ目アマツバメ科

アマツバメ

Apus pacificus kurodae (Domaniewski, 1933)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類(VU)



選定理由

海岸や島嶼の繁殖地周辺ではよく飛翔しているが、以前は平野部の上空で時折見られていた群れを見る機会が減っているように感じられる。また、全国的に減少しているとの報告もある。ただし、これまであまり注目されていなかったこともあり、県内の減少傾向を明確に示す十分な情報が得られていない。

概要

全長約20cm。国内には夏鳥として渡来し、海岸や島嶼、山地の崖などで繁殖する。2016-2021年の全国繁殖分布調査で記録メッシュ数や現地調査の記録が減少しており、アマツバメ類やツバメ類など飛翔昆虫を捕食する鳥が軒並み減少していることから、こうした昆虫が減ったことが原因になっている可能性が示されている。

参考文献

中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を撮こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

夏鳥として渡来し、崖のある海岸や島嶼で繁殖が確認されており、繁殖地周辺では飛翔する群れがよく観察される。山地の上空でも飛翔する群れが見られ、崖地で繁殖している可能性もある。海岸や小島嶼に崖地が多い隠岐諸島では観察する機会が多く、個体数も多いと考えられる。

存続を脅かす原因

海岸の崖地の状態に、繁殖に影響するような変化はないと考えられ不明。全国的な減少から餌となる飛翔昆虫の減少の可能性が示されているが情報が不足している。(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

チドリ目シギ科

ホウロクシギ

Numenius madagascariensis (Linnaeus, 1766)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類



選定理由

国内では、近年シギ・チドリ類が渡りの時期に利用できる干潟や水田は減少傾向にあり、渡りのエネルギー補給に影響が出ていると考えられている。本種も、県内に旅鳥として渡来するが少なく、もともと広い干潟がないこともあり、ランクを判断するには情報が不足している。

概要

全長約61cm。長く下に湾曲した嘴が特徴。ダイシャクシギに似るが全体に褐色が濃く、腰と翼の下面が白くない。国内ではおもに旅鳥だが、一部では越冬する個体もいる。海岸や河口部の広い干潟などで見られ、水田に入ることもある。嘴を深く泥の中に差し込んだりしながら、ゴカイやカニ類などを捕食する。

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類。250pp。ぎょうせい。東京。
北藤努 (2015) 本号の表紙。スペキュラム。165。1。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>。304pp。保育社。大阪。
植田睦之 (2004) ホウロクシギ。Bird Research News。1(3): 66-67。

県内での生息地域・生息環境

県内には干潟のような環境がほとんどなく渡来数は少ないが、旅鳥として春と秋の渡りの時期に河口部の砂泥地や水田などで見られる。1〜数羽が見られることがほとんどだが、10羽以上の観察情報も複数あり、出雲市では2015年に18羽が観察されたことがある。

存続を脅かす原因

河口部などの砂泥地や浅場は限られており、本種の利用に適した環境は少ない。本県では水田の観察例が多いが、春や秋の渡りの時期に湿地状の水田や休耕田が少なくなっていると考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

チドリ目ウミスズメ科

マダラウミスズメ

Brachyramphus perdix (Pallas, 1811)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

情報不足

No Image

選定理由

本種は冬鳥として県下の日本海域に渡来する。近年確認されるのが少なくなってきたが、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

全長24cmほどで、ウミスズメとほぼ同大。種としては、アリューシャン列島を中心に、東はカナダやアメリカの沿岸、西は日本沿岸に至る範囲に分布する。ウミスズメのなかまでは珍しく、内陸部の樹上で営巣し繁殖するといわれている。冬季、全国各地の沿岸海上などに南下し、魚類のほか甲殻類などを潜水して捕食する。

参考文献

川崎康弘 (2018) 網走沖の海鳥 ウトウとマダラウミスズメについて。北海道海鳥保全研究会。北の海鳥。6: 16-19。
ネチャエフ.V.A.・藤巻裕蔵 (1994) 南千島鳥類目録 (国後、択捉、色丹、歯舞)。126pp。北海道大学図書刊行会。札幌。
日本ウミスズメ研究会・Pacific Seabird Group (1996) マダラウミスズメの繁殖確認調査について。http://www2.gol.com/users/kojiono/Madara_Project2.html。 (2025年9月1日閲覧)
島根県立博物館 (1978) 伊達コレクション鳥類標本目録。128pp。島根県立博物館。松江。

県内での生息地域・生息環境

日本海の海上に渡来する。冬季から春頃にかけて隠岐航路の観察例などがあるほか、油汚染時の漂着事例がある。宍道湖や中海でも記録がある。

存続を脅かす原因

油の流出や海洋汚染、魚網への絡まりなど。

(執筆: 佐藤 仁志)

情報不足 (DD)

チドリ目ウミスズメ科

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus antiquus (Gmelin, 1789)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 秦智秋

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

絶滅危惧ⅠA類



選定理由

冬鳥として県下の日本海域に渡来するが、近年確認されるのが少なくなってきた。確認が難しく、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

全長25cmほどで、嘴が短くて太く、眼の後方に白線がある。北太平洋、千島アリューシャン列島、北海道天売島などの断崖の岩の上や、岩の割れ目などで繁殖する。冬季、沿岸海上などに南下し、魚類のほか甲殻類などを潜水して捕食する。

参考文献

千嶋淳 (2013) 北海道の海鳥1 ウミスズメ類①。55pp。NPO法人日本野鳥の会十勝支部。帯広。
千嶋淳 (2014) 北海道の海鳥2 ウミスズメ類②、アホウドリ類。55pp。NPO法人日本野鳥の会十勝支部。帯広。
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>。304pp。保育社。大阪。
綿貫豊 (2010) 海鳥の行動と生態-その海洋生活への適応。317pp。生物研究社。東京。

県内での生息地域・生息環境

日本海の海上に渡来する。冬季から春頃にかけて沿岸や隠岐航路の船上から観察されることがあるほか、油汚染による漂着事例もある。

存続を脅かす原因

油の流出や海洋汚染、魚網への絡まりなど。

(執筆: 佐藤 仁志)

情報不足 (DD)

チドリ目ウミスズメ科

コウミスズメ

Aethia pusilla (Pallas, 1811)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

—

No Image

選定理由

冬鳥として県下の日本海域に渡来することが分かっているが、その実態などは不明であり、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

全長15cmほどで、ウミスズメ類中最も小型の種。北方のチュート半島、アリューシャン列島、プリピロフ諸島などで繁殖し、繁殖期以外はほとんど海上生活をしている。冬季、島根県沖の海上などに南下し、魚類のほか小型の甲殻類などを潜水して捕食する。

参考文献

千嶋淳 (2013) 北海道の海鳥1 ウミスズメ類①. 55pp. NPO法人日本野鳥の会十勝支部. 帯広.
中村登流監修 (1984) 原色ワイド図鑑4 鳥. 学習研究社. 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社. 大阪.
島根県立博物館 (1978) 伊達コレクション鳥類標本目録. 128pp. 島根県立博物館. 松江.

県内での生息地域・生息環境

おもに冬季に内陸への迷行の記録や、沿岸への漂着事例などがあることから、日本海の海上に渡来していると考えられる。

存続を脅かす原因

油の流出や海洋汚染、魚網への絡まりなど。

(執筆: 佐藤 仁志)

情報不足 (DD)

ペリカン目サギ科

ゴイサギ

Nycticorax nycticorax nycticorax (Linnaeus, 1758)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
—	—	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類 (VU)



撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

選定理由

近年、減少したと考えられるが、夜行性であることや、これまであまり注目されていなかったこともあり、情報が少なくカテゴリ判断が難しい。

概要

全長約58cm。成鳥は頭と背が紺色で翼は灰色。後頭部から長く細い冠羽が伸びる。夜間に飛びながら「クワツ」と鳴く声は特徴的。国内には本亜種が全国的に分布し、東北以北は基本的に夏鳥、そのほかでは留鳥または漂鳥。おもに夜行性だが繁殖期などは日中も活動し、水田や河川などで魚やカエル、昆虫などを捕食する。集団繁殖し、ほかのサギ類やカワウなどと混合コロニーとなることも多い。2016-2021年の全国鳥類繁殖分布調査で減少傾向が顕著

参考文献

遠藤菜緒子 (2005) ゴイサギ. Bird Research News, 2(8): 4-5.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社. 大阪.
植田睦之 (2022) 全国鳥類繁殖分布調査の結果でゴイサギとパンが狩猟鳥獣から解除に. バードリサーチ ニュース 2022年9月: 2. (オンライン) <https://db3.bird-research.jp/news/202209-no2/>. 閲覧2025-6-15.
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年. 170pp. バードリサーチ・日本野鳥の会. 東京.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会. 東京.

とされ、2022年に狩猟鳥獣から解除された。2016-2022年の全国越冬分布調査の減少率は全種の中でも上位とされる。

県内での生息地域・生息環境

種としては留鳥で、現在、既知のコロニーが県東部に1カ所あるが、ほかに情報が得られていない。隠岐は過去に繁殖記録があるが、近年は確認されていない。

存続を脅かす原因

水田が減りつつあり、圃場整備や作付けの変化などで採食に適した水田や水路も減っていると考えられる。河川改修や外来種などの影響で餌資源となる水生生物が減っている可能性もある。

(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

ペリカン目サギ科

ササゴイ

Butorides striata amurensis (Linnaeus, 1758)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類 (VU)



撮影者(提供者): 井山有三

選定理由

近年、県内に確実な繁殖の情報がなく、渡りの時期には観察されるが数は少ない。

概要

全長約52cm。雌雄同色で成鳥の頭上は青みのある濃灰色で冠羽がある。翼は青灰色で雨覆と風切の羽に白い縁がある。虹彩は黄色。国内の大部分に夏鳥として渡来し、九州や本州の一部では越冬、薩南諸島以南では冬鳥として滞在する。水辺で魚類や甲殻類などを捕食し、昼夜ともに活動する。繁殖期には水辺近くの雑木林などの樹上に営巣する。全国繁殖分布調査では減少傾向が顕著とされる。

参考文献

三上かつら (2014) ササゴイ. Bird Research News, 11(7): 4-5.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社. 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会. 東京.

県内での生息地域・生息環境

近年、夏季の記録は少なく、おもに渡りの時期に河川や水田などで見られることがある程度で、1羽の情報がほとんどである。1980年代には江津市に繁殖地があったが、2013年には確認されなかった。しかし、2015年に同地域でごく少数の繁殖が確認され、2016年にも本種のものと思われる巣の傍らに成鳥1羽が確認されていた。また、近年、その近隣で夏季に成鳥が観察されていたため、2024年に調査したが確認されず、この地域では繁殖していないと考えられた。

存続を脅かす原因

河川改修や水辺の樹林地の伐採などによる生息適地の減少など。採食に利用可能な水田や水路も少なくなっていると考えられる。

(執筆: 森 茂晃)

鳥類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

情報不足 (DD)

ペリカン目サギ科

アマサギ

Bubulcus ibis coromandus (Boddaert, 1783)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

絶滅危惧 I B類 (EN)



選定理由

近年、減少したと考えられるが、これまであまり注目されていなかったこともあり、カテゴリを判断する情報が不足している。

概要

全長約50cm。繁殖羽は頭部から首と背中への飾り羽がオレンジ色のほかは白く、非繁殖羽はほぼ全身が白い。日本には本亜種がおもに夏鳥として渡来し、九州以南では越冬もしている。水田がおもな採食地だが草地も好み、バッタなどの昆虫やカエルなどをよく食べる。家畜やトラクターなどの後ろで飛び出した小動物を狙うこともある。集団繁殖し、ほかのサギ類と混生して樹上営巣することが多い。2016-2021年の全国繁殖分布調査で減少傾向が顕著とされる。

参考文献

藤岡正博 (2006) アマサギ. Bird Research News, 3(4): 4-5.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

夏鳥として渡来していると思われるが、かつて斐伊川の河畔林にあったコロニーなどが消失しており、現在の繁殖の状況はよく分かっていない。おもに平野部の水田地帯で近年は数羽から10羽前後が採食していることが多い。数十羽以上の観察例もあるが、渡りなど一時的な可能性もある。隠岐諸島では確実な繁殖記録がなく、渡りの時期の通過と考えられる。

存続を脅かす原因

圃場整備や作付けの変化などで餌資源が十分にある期間や環境が少なくなっている可能性がある。

(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

ペリカン目サギ科

コサギ

Egretta garzetta garzetta (Linnaeus, 1766)

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

絶滅危惧 II 類 (VU)



選定理由

近年、減少したと考えられるが、これまであまり注目されていなかったこともあり、カテゴリを判断する情報が不足している。

概要

全長約60cm。体は白く、嘴と脚は周年黒色で足指は黄色。繁殖羽は頭部に2本程度の飾り羽がある。国内には本亜種が生息し、本州以南で留鳥として生息するほか、北日本のものは冬季に暖地へ移動するものもある。水田や河川、湖沼などの水辺で、魚類や甲殻類などを採食する。2016-2021年の全国繁殖分布調査で減少傾向が顕著とされ、2016-2022年の全国鳥類越冬分布調査でも減少率は上位とされる。

参考文献

平野敏明 (2011) コサギ. Bird Research News, 8(3): 4-5.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・奴賀俊充・山崎優佑 (2023) 全国越冬分布調査報告 2016-2022年. 170pp. パードリサーチ・日本野鳥の会, 東京.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

県内での生息地域・生息環境

種としては留鳥と考えられるが、現存しているコロニーなど繁殖の状況はよくわかっていない。隠岐諸島では渡りの時期などに見られ、繁殖の記録は見当たらない。水辺で単独で採食していることが多いが、餌が多い場所などでは数羽以上が見られることもある。非繁殖期の時あるいは帰へ集まる飛行時などには群れが見られる。

存続を脅かす原因

水田が減りつつあり、圃場整備や作付けの変化などで採食に適した水田や水路も減っていると考えられる。また、河川改修や外来種などの影響で餌資源となる水生生物が減っている可能性もある。

(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

タカ目タカ科

イヌワシ

Aquila chrysaetos japonica Severtsov, 1888

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

絶滅危惧 I B類



選定理由

国内で絶滅の危機にある本種(亜種)の存続に、県内の環境がどれだけ寄与しているかは不明だが、広い行動圏を持つとされるだけに、生態系の頂点に立つ希少な猛禽類が観察される地域には相応の認識と配慮が必要と考えられる。

概要

翼開長が2m前後になる大型の猛禽類。本亜種は日本および朝鮮半島に分布する。国内の個体数は約500羽程度と推定されるほど少ない。分布は限られ、2012年には九州・四国ではほとんど絶滅状態で、おもな生息地は本州の中部以北とされる。広い行動圏を持ち、おもにノウサギなどの哺乳類や鳥類、爬虫類、両生類を捕食する。国内希少野生動物植物種であり、国の天然記念物。

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい, 東京.
永安誠 (2022) 島根県吉賀町におけるイヌワシの初記録. 高原の自然史, 22: 47-48.
大竹邦晴・上野吉雄・石井秀雄・北岡亨一・加藤淳司・山本茂・柳瀬美幸・森孝之・藤野徹・安田巨之・中越信和 (2018) 中国地方におけるイヌワシの展業期の狩り場. 高原の自然史, 18: 49-55.
須藤明子 (2012) イヌワシ. Bird Research News, 9(5): 4-5.
田中幾太郎 (1982) 消えゆく六日市の野生動物. 165pp. 田中幾太郎, 益田.

県内での生息地域・生息環境

中国山地などでまれに観察され、漂行することがあるという状況と考えられる。過去に営巣していたとする文献記載があるが、明確な記録は見当たらず、現在も県内で繁殖の可能性は低いと思われる。隠岐は種名が記載された古い文献はあるが、確実な記録は不明。

存続を脅かす原因

国内の生息環境は大規模な落葉広葉樹林の伐採とスギ・ヒノキ植林によって激変したとされる。また、放牧や伐採の跡地など展業期の採餌場所の減少が餌不足の要因の一つとも考えられている。

(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

タカ目タカ科

ツミ

Accipiter gularis gularis (Temminck & Schlegel, 1845)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):長廻哲雄



選定理由

食物連鎖の頂点に位置するタカの1種で、その生息は生態系が豊かであることを証明する。県内で繁殖している可能性もあるが、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

オスは全長約27cm、メスは約30cm。日本のワシタカ類の中でもっとも小型のタカ。成鳥オスの頭部から背は青黒色で喉から腹は淡い橙色の横斑。成鳥メスの頭部から背はオスよりも少し淡色で、喉から腹は灰褐色の横斑。幼鳥の背は濃褐色。喉から胸は褐色の縦斑で腹は横斑になる。幼鳥、若鳥、成鳥メスには喉の中央に灰褐色の縹線がある。国内では本亜種が九州以北で夏鳥として

参考文献

平野敏明 (2005) ツミ, Bird Research News, 2(2):2-3.
星野由美子・市橋直規・中森純也 (2010) ふれあいの里奥出雲公園の鳥類相 (中間報告). 島根県立三瓶自然館研究報告, 8: 33-39.
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

繁殖する。平地から山地の林に生息し、アカマツに好んで営巣することが知られている。近年では住宅地や公園の緑地、街路樹などでの繁殖が確認されるなど、関東地方では増加傾向にある。おもに小鳥類を捕食するが、昆虫や小型の哺乳類を捕食することもある。

県内での生息地域・生息環境

国内の分布では夏鳥とされ、雲南市では造巢行動が観察されたことがあるほか、夏季の記録も散見されるが、確実な繁殖の記録はまだない。

存続を脅かす原因

森林の伐採や開発、枯れなどの林相変化による生息適地の減少、ハシブトガラスなどによる繁殖の妨害など。

(執筆: 星野 由美子)

情報不足 (DD)

タカ目タカ科

ハイタカ

Accipiter nisus nisosimilis (Tickell, 1833)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



選定理由

食物連鎖の頂点に位置するタカの1種で、その生息は生態系が豊かであることを証明する。県内ではおもに冬鳥として渡来していると考えられるが、夏季の観察例もある。ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

オスは全長約32cm、メスは約39cm。成鳥オスは頭から背が暗青灰色。胸から腹は白く、橙褐色の横斑が密にある。国内には本亜種がおもに本州中部以北で繁殖し、冬期は全国で見られる。平地から亜高山帯の林に生息し、秋冬には平野部の農耕地やヨシ原にも現れる。おもに小鳥

参考文献

平井克彦 (2013) ハイタカ, Bird Research News, 10(6):4-5.
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥, 719pp. 山と溪谷社, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>, 301pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年, 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

類を捕食するが、小型の哺乳類も捕らえることがある。全国鳥類繁殖分布調査によれば、1990年代から記録地点は大きく減少している。一方で全国越冬分布調査では、1980年代と比べ2016—2022年は大きく増加した。

県内での生息地域・生息環境

冬季に平地や農耕地などで観察されることが多い。夏季に山地などで観察例があり、繁殖の可能性もあるが、実態は把握できていない。

存続を脅かす原因

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少など。

(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

情報不足 (DD)

タカ目タカ科

オジロワシ

Haliaeetus albicilla albicilla (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

撮影者(提供者):(公財)ホシザキグリーン財団



選定理由

本種(亜種)は北海道以外では珍しく、本県にはまれな冬鳥として渡来する。以前は、宍道湖西岸部に毎年のように渡来し越冬していたが、近年確認されることが少なくなっておりランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

その名のようにくさび型の白い尾羽を持ち、曇のように幅の広い翼を持つ褐色のワシ。全長69—92cmで、翼開長は2m以上にも及ぶ。ロシアのカムチャツカやサハリン、沿海地方などで繁殖しており、少数が北海道の東部と北部の海岸に近い森林や、内陸の湖沼周辺の森林で繁殖する。

参考文献

環境省 (2018) 平成 29年度オジロワシ営巣状況等調査業務 (道北地域) 報告書, 環境省北海道地方環境事務所, 札幌.
森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1998) 図鑑日本のワシタカ類 第2版, 631pp. 文一総合出版, 東京.
杉山弘・斎藤満 (2003) 北海道天塩川中流域のオジロワシの繁殖状況と繁殖期の食物資源について, Strix, 21: 151-158.

県内での生息地域・生息環境

冬鳥として渡来し、宍道湖西岸部や神西湖、江の川などで比較的よく見られたが近年はほとんど見られなくなった。

存続を脅かす原因

休憩場などへの人の立ち入り(特にカメラマン)、暗に利用していた大木の消失、有害化学物質の体内蓄積、風力発電施設への衝突など。

(執筆: 佐藤 仁志)

情報不足 (DD)

スズメ目モズ科

アカモズ

Lanius cristatus Linnaeus, 1758

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 秦智秋

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I A類 (CR)



鳥類

選定理由

国内では個体数の減少が著しく、繁殖地も局部的で絶滅に瀕していると考えられる。県内でも繁殖していたことがあるが、近年は確認されていない。県内の生息状況を十分に把握できていない可能性もあり、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

概要

国内では、亜種アカモズと亜種シマアカモズが記録されており、夏鳥として北海道、本州中部以北、四国などで繁殖するのは亜種アカモズ。全長約20cm。成鳥は頭部から背が赤茶色で過眼線は黒く、白い眉斑は頸までつながる。平地から山地の明るい林や低木のある草原などに生息

参考文献

原一 (2016) アカモズ. Bird Research News, 13(5):1-2.
叶内拓也 (2024) 山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥. 719pp. 山と溪谷社, 東京.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.
植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 175pp. 日本繁殖分布調査会, 東京.

する。全国的には1970年代以降、記録メッシュ数が激減した。越冬環境の悪化が減少の一因であると考えられているが、生息に適した農耕地や里山の環境が消失したことが繁殖の減少につながるとされている。

県内での生息地域・生息環境

県内では、海岸近くの林や農耕地、河川敷などの草地に木が適度に生える開けた環境などで観察情報があり、近年は渡りの時期に亜種アカモズや亜種シマアカモズがまれに観察される状況と考えられる。過去には大社町で亜種アカモズが繁殖していたが、近年は確認されていない。

存続を脅かす原因

生息適地の環境変化などが考えられるが、県内の状況は不明。
(執筆: 星野 由美子・森 茂晃)

情報不足 (DD)

スズメ目ヨシキリ科

コヨシキリ

Acrocephalus bistrigiceps Swinhoe, 1860

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

県内でも繁殖が確認されたことがあり、定着している可能性は低いかもしれないが、相応の認識と配慮は必要と思われる。また、旅鳥として、特に秋にはかなり多くの個体が山陰を通過しており、渡りの中継地として重要な地域と考えられる。

概要

全長13cm前後で、スズメより小さい。雌雄同色で、オオヨシキリに似た羽色だが白い眉斑の上にある黒い線が目立つ。国内には夏鳥として渡来し、おもに本州中部以北の草原で繁殖する。オオヨシキリと同じような環境に生息するが、オオヨシキリが草丈の高い密生したヨシ原で繁殖するのに対し、より丈の低い草原に営巣する傾向がある。

参考文献

濱尾章二 (2014) コヨシキリ. Bird Research News, 11(12): 6-7.
中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.
日本野鳥の会島根県支部 (1997) 第51回愛鳥週間「全国野鳥保護のついで」記念誌「しまねの鳥」. 198pp. 島根県農林水産部森林整備課, 松江.

県内での生息地域・生息環境

おもに渡りの時期に水辺のヨシ原や河川敷の草原などで観察されるが、これまでに宍道湖西岸部で繁殖した事例がある。ほとんど草原の中にいるため存在に気づきにくい。春の渡りではさえずる声が聞こえることがあるほか、秋は数が多いためヨシ原の縁など草の中を移動する姿が比較的見られる。

存続を脅かす原因

生息適地は河川敷の草原などだが、こうした環境は河川の工事や植生の遷移などで不安定と考えられる。また、繁殖期に極端な降水で増水し、河川敷の草原が浸水することによる影響も懸念される。
(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

スズメ目センニュウ科

オオセッカ

Locustella pryeri pryeri (Seeböhm, 1884)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): (公財)ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類



選定理由

東アジア固有の希少種であり、国内希少野生動物種でもある。近年、県内で冬季の記録が複数得られているが、非繁殖期は観察されにくいことから生息状況について十分に把握できていない。

概要

全長約13cm。上面は薄い黄土色で、上尾筒を除いて黒い軸斑がある。本亜種は日本の固有亜種とされ、海岸から遠くない湖沼周辺や河川沿いの、おもにヨシやスキなどのイネ科やイグサ科が生育する湿った草原に生息する。東北や関東地方の限られた地域で繁殖し、東北から九州にかけて越冬する。繁殖期はさえずり飛行をするなど確認されやすいが、

参考文献

濱田義治・長廻哲雄・森田進・石本賢治・安井賢次 (1994) しまねの野鳥 II. 123pp. 山陰中央出版社, 松江.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編 (2014) レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 250pp. ぎょうせい, 東京.
高橋雅雄・宮野勇・古山隆・三戸貞夫・日比野政彦 (2023) 中国四国地方におけるオオセッカ *Locustella pryeri pryeri* の越冬状況. 日本鳥学会誌, 72(2): 235-239.

非繁殖期は草むらに潜んでいることがほとんどで観察が難しいため、その分布の全体像は明らかではないとされる。

県内での生息地域・生息環境

冬季に県東部の河川敷や湖岸のヨシ原、耕作放棄地などの草原で数例の確認がある。渡りの時期には、情報は少ないが県東部のほか中部でも観察されている。これらの場所は、どちらかという背丈の高いヨシが密集した環境より、丈の低い草原がそれらが混在するような湿地が多い。

存続を脅かす原因

湿性草原の減少や消失。本種が好むヨシが疎らに生え、下草が豊富で地面が湿っている植生環境は遷移でも縮小しやすく不安定と考えられる。
(執筆: 森 茂晃)

情報不足 (DD)

スズメ目ツグミ科

カラアカハラ

Turdus hortulorum Sclater, 1863

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

本種は、三瓶山で繁殖が確認されたほか、島根半島の一部でも繁殖期に観察されている。既知の繁殖地がきわめて局地的で存続基盤は脆弱である。

概要

全長約23cm。オスは頭頂から背、尾羽までが青灰色で、喉から胸はそれよりも淡色。腹から下尾筒は白く、胸から脇腹が橙色。メスは上面が灰褐色で、胸と脇に黒い斑点がある。ロシア東部から中国東北部で繁殖し、冬は中国南部やベトナム北部で越冬する。国内では数少ない旅鳥や冬鳥として、おもに日本海側の島々などで観察されていたが、近年、各地で繁殖期にも観察されるようになった。繁殖は三瓶山のほか対馬でも確認されており、石川県や広島県北部では営巣が観察されている。

参考文献

福島英樹・中村豊・湯浅芳彦(2012)カラアカハラの越冬に関する事例報告。宮崎県総合博物館研究紀要。32: 1-10
 星野由美子・市橋直規(2020)三瓶山におけるカラアカハラの確認記録。島根県立三瓶自然館研究報告。18: 79-81。
 市橋直規・米田重玄・山崎智子。2018。美保関における渡り鳥長期調査報告。ホシザキグリーン財団研究報告。21: 273-280。
 小海途銀次郎・和田貞次・奥野一男(2018)日本におけるカラアカハラの完成した巣と卵の初確認記録。Strix。34: 105-109。
 上野吉雄・伊東進也・原竜也・石井秀雄・前田要(2021)広島県臥竜山麓におけるカラアカハラの繁殖確認。高原の自然史21: 1-2

県内での生息地域・生息環境

隠岐も含め各地の樹林や林縁部で渡りの時期に観察されることがあるほか、島根半島の一部では繁殖期にも観察されている。三瓶山では2016年から繁殖期に確認されて以降、毎年観察されており、2024年には複数ペアの生息、2025年には標識調査により顕著な抱卵斑があるメスが複数確認されている。

存続を脅かす原因

繁殖に適した森林環境の人為的な改変やニホンジカの増加による林床の攪乱と植生の変化。繁殖地への立ち入りなどの人為的な影響。

(執筆: 星野 由美子)

情報不足 (DD)

スズメ目ヒタキ科

コサメビタキ

Muscicapa dauurica dauurica Pallas, 1811

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

本種(亜種)は、県内でも夏鳥として渡来するが、近年は繁殖の確認が減少していると考えられる。ただし、ランクを判断するに足りる十分な情報は得られていない。

概要

全長13cm。成鳥の頭から背は灰褐色で白いアイリングがあり、目は白っぽい。嘴の大半は黒いが、下嘴の基部に黄色味がある。雌雄同色。北海道から九州までの全国各地に夏鳥として渡来する。平地から標高1,000m程度まで分布し、落葉広葉樹林、雑木林、カラマツやスギ、ヒノキなどの人工林などに営巣する。木の枝に椀型の巣を作り、表面にコ

参考文献

叶内拓也(2024)山溪ハンディ図鑑 新日本の野鳥。719pp。山と溪谷社。東京。
 中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>。301pp。保育社。大阪。
 植田睦之・植村慎吾(2021)全国繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年。175pp。日本繁殖分布調査会。東京。

ケを貼り付けるのでこぶのように見える。飛んでいる昆虫類を、飛翔して空中でくわえとり、再び同じ枝に戻る。全国鳥類繁殖分布調査によると、1970年代から1990年代にかけては、確認メッシュ数が減少したが、2010年代には観察地点が大きく増加している。

県内での生息地域・生息環境

夏鳥として丘陵から山地の森林に渡来する。密生した林より明るい林を好み、比較的大きな樹木がある公園や社寺林で営巣した例もある。過去に営巣していた場所で見られなくなったところが複数ある。

存続を脅かす原因

繁殖に適した森林環境の改変などが考えられるが、県内の状況は不明。

(執筆: 星野 由美子)